

THE NEXT RESTART

バンブル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ウルトラマンとして目覚めた記憶喪失の男。自分は何者なのか、そして何ができるのか。それを知るために、いくつもの世界を巡る旅を始める！

目次

コスモスペース編

新たなる目覚めネクスト

正義執行グローカー

アナザースペース編

銀河超えてエスマラルダ

究極勇士フォース

ネオフロンティアスペース編

英雄去りしワールド

決戦ネオフロンティア

フューチャースペース編

巨人拒むアース

謀略ロストザウエイ

U p i n & a m p ; I p i n , s s p a c e 編

助け求むフォーリナー

銀河救助リブット

サイドスペース編

運命——ジード——

正義——ジヤステイス——

綾香市編

白銀——アンファンス——

赤銀——ジユネットス——

雲が丘編

勝利——ビクトリー——

銀河——ギャラクシー——

降星町編

破壊神 —ザギ—

名前 —ネーム—

コンピュータワールド編

覚・醒 —アクティブ—

騎・士 —ナイト—

X編

邂・逅 —エンカウント—

実・現 —リアライズ—

ウルトピア編

任務 —ミッション—

理想郷 —ウルトピア—

誕生 —バース—

対立 —コンフリクト—

激突 —クラッシュ—

世界 —ワールド—

惑星ダンパレダ編

故郷 —ホームタウン—

円環 —オーブ—

集結 —ギャザー—

奇襲 —サプライズ—

ウルトラマンの星編

眠れる神

怪獣総進撃

宇宙の異変と渡り鳥

99 96 93

90 86 83 80

77 74 71 68

60 57 54 52

49 47

オリジンサーガの世界編

彼の名はオーブ

闇の侵攻

ダイナミックな戦士

超時空編

巨人を超える巨人

悪魔の傀儡

Nの世界編

もうひとりの悪魔

レベル3マルチバースの悲劇

U40編

ウルトラの星

賢者の導き

セブンXの世界編

石像とノア

M78スペース編

銀色の翼飛翔するとき

究極の闇と光

果て

新たなる旅立ち

番外編

平穏と不穏

T H E N E X T R E S T A R T

145 140

138 135 132 130

128

125 122

118 115

111 108

105 103 101

コスモスペース編

新たなる目覚めネクスト

緑の平原が広がるその地で、俺は目を覚ました。

地面に寝転がっていた体を起こす。自分が誰なのか、ここがどこなのかさっぱりわからない。おもむろに辺りを見渡してみる。太陽が周囲を明るく照らしている。草花が咲き誇り、雄大な自然や山が見える。しかし、動物の気配はない。

「きれいな場所だな……」

自分の体を見てみる。黒っぽいジャケットとジーンズを着て、首にネックレスをかけている。不思議な形の赤いアクセサリが日の光を浴びてきらりと輝いた。

水溜りを発見し、のぞき込む。自分の顔は、男らしい鋭い顔つきをしていた。服を探るが、自分の存在を示すものは何も出てこなかつた。

「さて、どうしたもんか……」

途方に暮れていると、遠くから大きな音がした。異変を感じ、そちらに向かってみるとする。

しばらく歩く。その間も、美しい風景が広がっており、やがて山も見えてきた。だが、突然視界が暗くなる。先ほどの音の正体がそこにいた。

それはとてもない大きさだった。全容が見えず、俺は首を曲げて上を見上げる。

巨大な怪鳥だ。羽を広げ、この場に先ほど降りてきたようだ。青い体毛に覆われており、くちばしやトサカも見られる。しかし、記憶の混濁している俺にもわかる。こんな巨大な生物がいるのは普通じやあり得ない。

「なんてバケモノだ……」

身の底から恐怖を感じる。すると、怪鳥の近くにさらに別の巨大な怪物も現れ始めた。一本角の二足歩行怪獣や体に赤い棘を持つ四足

歩行怪獣。続々と集結する巨大生物を前に俺はただ立ち尽くすことしかできなかつた。

その時、体の中から不思議な感情が沸き上がりつてくる。

—巨大な怪物を—

その謎の感情によつて俺は揺さぶられる。この怪物たちを、倒す？

—倒さなければ—

怪物たちがこの豊かな自然を壊す前に。自分が殺される前に。

不思議な感情と、焦りと、いくばくかの不安を抱えながら、俺は無意識のうちに走り出す。すると、胸のペンダントが赤く発光する。

その刹那。

俺の体は光に包まれ—そして銀色の巨人になつていた。

これなら、いける。あの怪物たちを倒す！ そう気を奮い立たせて怪物たちを見据える。

だが。

俺の体の大きさは巨大化したとはいえ、怪物たちには到底及ばない。そして、すぐにその変身も解除され、もとの姿と大きさに戻つてしまつた。

「今のはいつたい……？」

戻らない記憶。怪物たちの出現。巨人への変身。わからないことだらけだ。

頭の中のもやを振り払うように、巨大な音が響く。空だ。見上げると、何かが降つてくる。近づくにつれ、その正体が見えてくる。機械の塊だ。

怪物に加えて、機械……いつたい何がどうなつてるんだ！

機械は大きな音と衝撃とともに落下。すると、驚くべきことにその機械は変形し、巨大な人馬の形をとつた。

そして、自然と、俺を守るかのように怪物たちは機械に立ちふさがつた。

—怪物たちは自然を荒らし、俺を殺すものと無意識に思い込んでいた。しかし、違うのか？ この機械を倒すため、集まつたというのか

?

集まつた怪物たちを見渡し、人馬型の機械は電子音声を放った。
「敵性生命ヲ確認、殲滅スル」

正義執行グローカー

空から降ってきた機械は人馬の形をとり、こちらを標的とみなして近づいてくる。

「敵性生命ヲ確認、殲滅スル」

それに立ちふさがる三体の巨大生物。怪鳥、角の怪獣、棘の怪獣。そこで俺ははたと気づく。怪獣……？なぜか俺はその呼称を知っている。それだけじゃない、この怪獣たちの名前も知っている。リドリアス、ゴルメデ、ボルギルス。

そして、向こうの機械はグローカー！

これは、なくしたはずの俺の記憶なのか。しかし、自分のことについては思い出せない。

そうして考えているうちに怪獣たちとグローカーが戦闘を始めた。あのグローカーはルークと並ぶ戦闘特化形態、グローカーナイトだ。人馬の形状から繰り出される前脚の蹴りで怪獣たちを蹴散らす。怪獣たちも三体による手数で応戦する。だが、ナイトは鋭利な剣を取り出し、怪獣たちを近づかせない。

奴を倒すには、あの剣の間合いの外側から素早く内側に入り込み攻撃を与えるしかない。しかし、それをわかつていながら俺には何もできない。記憶が無いから、力が使えないのか？ それとも……

その時。

空から再び機械が降ってきた。周囲に落下したそれは、グローカーの尖兵・グローカーポーンの残骸だ。

それを目にした次の瞬間、同様に空から高速で何かが接近していく。

「あれは！」

空から超高速で降下し、突き出した足は吸い込まれるようにナイトの腕に突っ込む。

当然右腕が剣ごと破壊。ナイトの体制が大きく崩れた。

そこに現れたのは銀色の巨人。それも、俺が変身した姿よりも遥かに大きい。怪獣やグローカーと同程度の大きさだ。

俺は、彼も知っている。銀の体に光る紫の輝き。

超高速の戦士ウルトラマンコスモス スペースコロナモード。

彼は敵のナイト相手に、超高速で攻撃を仕掛け、着実に弱らせていく。剣を取り落とし、ナイトは守りの体制に入った。

コスモスは身体から光を発し、その体色は青に変わる。慈愛の勇者コスモス ルナモードだ。

その腕に光を集め、相手を鎮静化させるフルムーンレクトを放った。

その光を浴びたグローカーナイト。残念ながら、その暴走は止まらない。

仕方なく、コスモスは再びその姿を変化させる。希望の勇者、コスマス フューチャーモード。

コスモス最強の必殺光線、コスマストライクが敵の体を貫いた。

怪獣たちがゆっくりと元の場所に帰っていく。そんな中、ウルトラマンコスモスが人間の姿へ変化した。

青い服の青年だ。彼は、俺に気づいて駆け寄ってくる。

「僕は春野ムサシ。君は？」

俺は、彼に今までのこと話をした。

記憶喪失であること。気づいたらここにいたこと。巨人—ウルトラマンに変身したこと。

そして彼に、この場所と怪獣、機械について聞いた。

「この場所は遊星ジュラン。怪獣と共に存する星さ。怪獣たちは、この星で平和に暮らしている。そして……」

ムサシは壊れた機械の残骸を見る。

「あの機械はグローカー。正義を守るロボットなんだけど……最近、暴走してしまっている」

どうやらムサシによると、グローカーの暴走の原因はこの宇宙の外側からもたらされたものらしい。しかし、ムサシはこの宇宙を守るために手一杯なため、原因を突き止めることができないという。

「よし……じゃあ俺も協力する。どこまでできるかわからないけど」

俺は先ほどまでとは違い、明確な生きる理由ができた。ここにいる怪獣たちを守り、そして暴走するグローカーを救う。

そう強く思った時、胸のペンダントが熱を持ち光り輝く。そして、赤い光に包まれ、俺は巨人へと変化した。

先ほどとは違い、怪獣たちやコスモスと同程度の大きさにまで巨大化。そして銀一色の身体に赤い光が射す。

その姿をみてムサシは言う。

「何のために戦うのか、それを忘れるな。そしていろんな世界を見るといい。そうすれば、君の記憶の手掛かりもきっと見つかる」

俺は感謝の意を込めて頷き、大空へ、広がる宇宙に向けて飛び出した。

自分は何者なのか。なぜ自分はこの力を持つてているのか。この力を何のために使えばいいのか。

道は示された。後は答えを見つけるだけだ。

宇宙を駆ける壮大な冒険は、まだ始まつたばかり。

アナザースペース編

銀河超えてエスメラルダ

ムサシ＝ウルトランコスモスとの邂逅により、俺の心の内面には変化が訪れた。

明確な生きる理由が見つかったのだ。当面の目標は、グローカーの暴走を止めること。その先で、自分の記憶や出自が思い出せればなお良い。

今現在、俺は宇宙を飛んでいる。巨人でいることもだいぶ慣れてきた。それでも、星から星へと渡る中で休憩は欠かせないが。

途中で、グローカーと戦うコスモスのような戦士を見かけた。俺が助力する前に片付け、去つていってしまったが。彼も、ウルトランのだろうか。

しばらくすると、一体のグローカーを発見した。周りに他の機体の気配は無い。あの戦士の気配も。俺は意を決して、そのグローカーを追いかける。しばらく追い続けると、やがてグローカーは何やら不気味な場所に入つてしまつた。宇宙の空間の中で何故か光を放ち、その先は全く見通すことができない。

この先に何があるのかは全く分からぬ。しかし、グローカーを放つておけば、先ほどの怪獣たちのように何も罪もないものが傷つくことになる。俺は、身体にグッと力を込め、その空間に飛び込んだ。

長いのか、短いのかわからないその空間をいつの間にか通り抜けていた。視界にはいっぱいに銀河が広がっている。いや、待てよ！

俺は遠くに見える白い点の集合を、『銀河』と認識した。これも、過去の記憶なのだろうか。それより、視界に無数の銀河が広がっているということは、ここは別の宇宙どうしをつなぐ空間のようなものなのだろうか。

視界の端に、先ほど追いかけていたグローカーが確認できた。あれを逃がしておくわけにはいかない。気を取り直し、その後を追跡す

る。光線を繰り出すと力が急激に減ってしまうため、宇宙空間では使いたくない。できれば、どこか地に足のつく場所に降りてもらいたいが。

しばらくすると、グローカーは別の銀河へと入っていく。そして、一つの星に向かつていった。

その星は、エメラルドのように輝く美しい星だ。降りていくその機体を追つて、俺も静かにその星に降り立つ。

草原が広がる美しい風景。その向こうにはその水晶のような宮殿も見える。そんな穏やかな世界に、グローカーの着地が破壊をもたらす。やはり、暴走したその機体は放つておけない。俺は草原に降り立つと、グローカーに向かい走り出した。敵機体はグローカーの中でも強力な種類である、グローカールークだ。上半身が大柄で、ナイト型とはまた違った威圧感を発している。俺が巨人になった姿よりも、一回り大きなその体躯。気圧されそうになるのをこらえ、その進行を食い止める。

（ぐつ……強い！　俺の力が足りない！）

その強靭な腕で、逆に俺が抑え込まれてしまう。このままでは、宮殿にまで破壊の手が及んでしまう……！！

そう思つた時、俺の背後の宮殿が。その表面の鏡が。まばゆく光り出し、次の瞬間……

「シルバークロス！」

手裏剣状の光線がグローカールークの腕を切り割く。緑の戦士が、鏡の中から現れた。

究極勇士フオース

「シルバークロス!!」

手裏剣状の光線がグローカールークの腕を切り割く。
緑の戦士が、鏡の中から現れた。

「ミラーナイフッ!!」

新たに手裏剣状の光線が無数に空中を乱舞し、暴走する機械の胴体
を切り刻んでいく。

稼働エネルギーを失ったグローカーはその場に直立不動のままで
倒れ、機能を停止した。

人間の姿に戻った俺は、巨大な鏡の戦士を見上げる。

俺に気づいたミラーナイトがかがんで話しかけてくる。

「あなたも……ウルトラマンですね、名を聞いても?」

そう問われて俺は困惑した。自分の名前すら思い出せないので。
「実は、記憶喪失のようで、名前は……」

そういうと、ミラーナイトは非礼を詫び、そしてこう提案してきた。
ひとまず、仮の名前をつけるのはどうか、と。

「しかし、自分の名前といつても何が良いのだろうか」

「では、マキ、というのはどうでしょう」

「マキ? マキ、か……良い名前だと思う、ありがとう! だが、なぜ
この名を?」

ミラーナイトは自分でも不思議だが、と前置きして言つた。

「君の変身した巨人の姿を見ていると、なぜかその名前がぴったりな
気がしてね」

「ところで、マキ」

ミラーナイトは俺に問いかける。

「あのロボットはいつたい? 君と同様、別の宇宙から来たようだが
……」

俺はコスモスとの出会い、そしてグローカーについて語つた。

するとミラーナイトは手を顎にあて、思案し始めた。

「機会が暴走……なにか嫌な予感がする」

すると突如、空から無数の銃撃が降り注いだ！

「何だ!?」

ミラーナイトが俺をかばつてくれたが、背中に傷を負い、戦いは厳しそうだ。そして、銃撃がもたらした煙の先には二体のロボットの影が。

「あれは……？」

ミラーナイトが答える。

「あれは……ジャンボットと、……ジャンナイン……私たちの、仲間だ……」

赤と白のコントラストが映えるボディ。右腕には共通して、巨大な重火器が備え付けられている。

「仲間……」

グローカーと同じように、暴走してしまったのだろうか。その目は赤く光つており、体からは紫の塵のようなものが噴出している。

「おおおおっ!!」

俺はウルトラマンとしての姿に変身した。しかし、俺を救ってくれたミラーナイト、その仲間を傷つけることなどできない……

躊躇している間にも、二体のロボットは俺に狙いを定めて近づいてくる。やはり、戦わなければいけないのか……そう思った時、ジャンナインの体が衝撃で吹っ飛んだ。

大きな音とともに遠くの地面に転がり倒れるジャンナイン。瞬時に、同様に吹き飛ばされたジャンボットの軀体が直撃する。

そこには、赤い戦士と、俺やコスモスと同じであろうウルトラ戦士が居た。

「彼らは……!?」

「私の仲間たち……！ グレンファイヤーと、ゼロ……ウルトラマンゼロだ！」

ミラーナイトがそう教えてくれる。

俺は二人に駆け寄る。

「おお!? お前もウルトラマンか！ 初めて見るな」

ゼロが気さくに話しかけてくる。ジャンボットたちがまだ起き上

がつてこないのを確認し、ゼロとグレンファイヤーに彼らの状況について話す。

暴走してしまっていること、原因はまだわからないこと、コスモスの力でも浄化できないこと。コスモスについて彼らが知っているのかはわからなかつたが一応話したところ、ゼロは知り合いのようで話が通じた。

「そういうことなら俺に任せろ！ 行くぜ！」

ゼロの赤と青と銀の体が光り輝き、金色にその色を変えた。

輝きの戦士、シャイニングウルトラマンゼロ。

その姿を発現させ、暴走するロボット兄弟のもとに駆け付ける。

そして、究極の力・シャイニングスター・ドライブを発動。頭上に太陽のようなものが現れ、眩い光が放たれる。

次の瞬間、ジャンボットとジャンナインの二人はもとに戻つていた。

「ここは……私はいつたい」

「僕は今まで何を……」

無事に済んだようだが、一体どうなつてているのかわからなかつた俺はゼロに問い合わせた。

ゼロは力を使いすぎたらしく、元の姿に戻り膝をついていた。
「ああ、俺もコスマスの力は使えるんだがな、それじゃダメそうだからな。時間を巻き戻したんだ」

いつたい彼は何を言つているのだろうか。しかし、二人がもとに戻つているところをみると、本当なのかも知れない。

自分に名前を付けてくれたミラーナイト、そして彼ら、ウルティメイトフォースゼロに礼を述べて俺はその美しい星を去つた。彼らも、この事件について調べてみると言つていた。

俺は再び宇宙へと飛び立つた。しかし、追ってきたグローカーはもうミラーナイトが倒した。そして、自分にはムサシのいる世界に戻る道筋もわからない。だが、この世界でも謎の機械の暴走は起こつている。さらに別の世界でも事件が起きているかもしれない。そして、そ

の原因への手掛かりも……

そう考え、俺は新たな世界へと向かつた。次に俺が目にするものは、一体何なのか。旅はまだ、始まつたばかりだ。

ネオフロンティアースペース編 英雄去りしワールド

宇宙を飛び、行くあてもなく旅をしていた俺のもとに、一筋の道しるべが現れた。それは、巨人の姿に変身するときに赤く発光する謎のペンドントから突然発せられた。

赤い閃光は輝きを損なわずに宇宙の遙か先まで伸びている。俺はその先に向かうことにしたのであつた。

グロークーを追つていた時に見たものと似た『銀河』を超えて、俺は別の銀河に足を踏み入れた。

そして、再び閃光を追つて飛ぶ。その示す先に、遊星ジユランや惑星エスマラルダに勝るとも劣らない美しい星が見えた。

「ここに、俺のやるべきことがあるのか……？」

早速俺はその星に降り立つことにした。

巨人の姿で降り立とうとしたが、そこには見渡す限りの建物が広がつており、とても安全に降りられる状況ではなかつた。さらに、空飛ぶ船が何やら警告を発している。

「な、なんだこの星は……!」

その星は、俺がこれから何度も訪れることになる、神秘の星・地球であった。

人間体に戻り、人通りの少ない通りに着地する。しかし、近くにいた子供に見つかってしまった。

興味津々で見つめてくる子供を無視して逃げるのはばかられ、ぎこちなく微笑み返す。

「や、やあ……ここにちは

子供は近寄り、俺に開口一番こう言つた。

「お兄ちゃん、ウルトラマンダイナなの!?」

「えつ……ウルトラマンダイナ……?」

聞きなれない名前に困惑する。いや、その前に。

この星には、俺以外のウルトラマンがいるのか？　もし、いるのなら会いたい。子供はそんな俺の様子に気づかずに続ける。

「それとも、ウルトラマンティガ!?」

また知らない名だ。

俺は子供に問い合わせてみる。

「えつと、俺は名もなきウルトラマン……？　なんだけど、この星にはウルトラマンがいるのかな？　教えてくれないかな」

「ええと、前はいたんだって。でも、今はいない」

「そうか、ありがとう」

ウルトラマンのいない星に来るのは、目覚めてから初めてだ。この星には人類の脅威はないのだろうか。平和な世界なら良いのだが。少し街を歩くと、巨大なモニターに映像が映されている。そこには見たことのないウルトラマンの姿。

先ほどの子供も言っていたが、かつてこの星にいた『ウルトラマンダイナ』のようだ。

「伝説の英雄、アスカ・シンがこの星を救つた『アスカ記念日』が16回を迎えた。街中では……」

モニターでは、過去のウルトラマンダイナの功績や人々の声が紹介されている。アスカ・シン。彼がダイナとなり、この世界を救つて消えた、という事が分かった。ウルトラマンティガについての情報は得られなかつた。

ふと横を見ると、隣に立つて俺と同様にモニターを眺めている女性がいた。

若い外見とは裏腹に、声色は低く、どこか異質さを感じさせる。しかも、何やら物騒なことを口にしている。

「我々の同胞を奪つた敵、かたき晴らせると思つたのに……」

俺は意識を集中してその女性を見やる。すると溢れてくる禍々しいオーラ……俺に気づいてニヤリと笑うこの女性は、この星の人ではない！！

決戦ネオフロンティア

俺に気づいた女性は、ニヤリと笑い俺の方へ手をかざす。すると一瞬にして景色が移り変わる。振動波で吹き飛ばされているのだ！こちらも巨人の力である念力で体制を立て直し、人気の無い路地に降り立つ。

女性は問う。

「貴様、ウルトラマンダイナか。それともゼロか、いやはやコスモスか」

偶然にも、彼女が挙げた名はいずれも俺が今までに見知ったウルトラマンたちだつた。

「違う。俺はマキ。名も無きウルトラマンだ」

俺は名乗る。しかし、彼女は意に介さないとばかりに近づいてくる。

「フツ……貴様が誰でも構わん。同胞の敵は討たせてもらう」

すると彼女の体が人間体から宇宙人の姿に変わつた。全身は黒を基調とし、体には赤と金のアーマー、背中には仰々しいマント。そして淡く水色に光る無機質な形状の目が、俺を怪しくにらむ。

「私の名はバット星人セエル。ウルトラマンどもによつて私の同胞は三人も殺された」

「待て！ それには何か理由があるはずだ！」

「黙れ！ 我々の侵略の邪魔をする奴らは誰であろうと許されない！」

俺の言葉に全く耳を貸さないバット星人セエル。おそらく、彼女は仲間の仇討ちのためウルトラマンダイナを狙つてこの星に来たのだろう。しかし、ここにダイナはいない。俺が代わりに戦わねば！

俺はバット星人の隙をついて、巨人の姿に変身する。しかし、大きさは抑えた銀色の姿で、だ。

周りの人々の騒ぎにならないよう、バット星人を捕まえ、飛び立つ。その星を離れ、人も空氣も無い近くの寂しい星に降り立つ。俺の手から抜け出したバット星人が巨大化。俺も赤い形態になり巨大化す

る。さらに、バット星人はそのマントから不思議な球体を取り出す。

「何だ……!?」

それは水色に光つており、歪な宇宙船のような形をしていた。バット星人はそれを取り込む。いや、同化しているというべきか。

「これは我が同胞が兵器として使つたもの……だが本当の使い方は！」

言つた直後、バット星人の体が変化していく。体からは突起や棘が現れ、その肉体は歪む。しかし、力は強化されているようだ。

「この力で、貴様を滅す！」

バット星人はこちらに向かつて突っ込んでくる。

どうやら、球体を取り込んだことで知能が低下しているようだ。しかし、身体能力が強化されているため、動きは素早く攻撃は重い。

さらに、俺は今まで一人で怪獣や宇宙人を退治したことはない。

しかし、ウルトラマンダイナのいないあの星の人々を見捨てるわけにはいかない。胸のペンドントの導きに従い、記憶を取り戻すまで、俺は終われないんだ！

腕にエネルギーを込め、クロスさせる。バット星人の大振りの攻撃を避けつつその背中に光線を叩き込む。しかし、敵はまだ倒れない。飛び上がり、空中で蹴りとパンチの応酬が繰り返される。だが、敵の動きは単純。

右に蹴り、次に左でパンチ。読めた！

その腕を取つて地面に落とし、もう一度光線発射！

大きな爆発とともに敵は絶命。

「初めて、ひとりで……」

人々を自分ひとりでも守れたという感慨が迫つてきた。しかし、時間は俺を許してはくれない。

胸のペンドントは光で新たな行き先をを指し示した。

「おいおい、少しば休ませてくれよ……」

しかし、今のように人々に危機が迫つているかもしれない。俺は気を引き締めなおし、次の目的地に向けて出発した。

フューチャーアース編

巨人拒むアース

「ウルトラマンなど過去の幻想だ。数年前は我々の世界を救ってくれた。しかし、今はどうだ！」

男は指令室で声を張り上げる。その声の先には、男と同じ制服を着た隊員たち。

「以前のふがいない我々とは違うことを、怪物に知らしめてやろう」

モニターには、町を破壊せんと迫る巨大な巨人の姿。黒と赤を配したその外見にはどこか異質さを感じる。

「地球防衛隊、出動！」

男の叫びに隊員が返事をし、それぞれ走つて持ち場につく。

発進した複数の戦闘機が巨人を攻撃する。連携射撃。巨人はそれをものともせず進む。

その先には、人々が逃げ惑う市街地。それを守るため、戦車が出動している。避難が済んだ場所の戦車が砲撃を始める。

巨人はそれを腕で弾き返す。戦車に直撃、爆発。さらに巨人の光弾が腕から放たれ、戦闘機が墜落。

「くそつ……どうすればいいんだ！」

モニターを見ながら男は唸る。最新の防衛兵器では全く歯が立たない。これでは、数年前の焼き直しではないか……

数年前、この世界は宇宙人に侵略された。男の所属する地球防衛隊は為すすべなく敗北したうえで。その後、ウルトラマンなる超越存在がこの世界を救い、そして去った。

第二の危機が迫るとも知らずに。

数日前、巨人は現れた。

データにあつた三人のウルトラマン。彼らに酷似しているが、どこか違う。その巨人はなんと、町を破壊し始めたのだ。巨人はその大き

な体に見合わず、小規模な破壊活動を行つた後に消滅。被害は最小限にとどまつた。

しかし、翌日も現れた。

その翌日も。

いや、毎日。

巨人の目的はわからない。我々に倒す手段もない。

この世界の住人は皆、ある日突然巨人に殺される恐怖に怯えながら生きている。

今日も巨人は、二、三建物を破壊したのちに消えた。

「監視衛星が謎の飛翔体を捉えました！ モニターに映像、映します」オペレーターが言う。男は顔を上げ、モニターを注視する。

隕石か何かかと思つたが、そうではない。

銀色に光る……巨人だ。

俺は、赤いペンダントの射す光を追つて、この宇宙の『地球』にやつてきた。人気の無いところに降り立ち、人間体を取る。

「さて、このペンドントの言うとおりに来てみたけど……前みたいに宇宙人が狙つているのかな」

辺りを警戒しながら、情報収集のため店に入つてみる。人々は心なしか元気がない。新聞を読むと、一面に大きく気になる記事が載つていた。

黒い巨人が街を襲つていてるというものだ。どうやら、この世界にもウルトラマンはいないらしい。

「これが、この世界での俺の役目か」

謀略ロストザウエイ

この世界と黒い巨人について集めた情報を要約するところだ。

まず黒い巨人だが、この世界に突然現れ、暴れているという。先ほど調べたところ、他の巨人や宇宙人、怪獣などの仲間は確認されていないようだ。

その容姿は、今まで見てきた他のウルトラマンとは違い、黒い目をしていた。体にも黒いラインが刻まれており、どこか暗い雰囲気だ。もつとも、俺は自分が変身した姿を自分で見たことがないので、俺も黒い目かもしないが。

次に、この世界についてだ。ウルトラマンはいないようだが、数年前に宇宙人の侵略にあつたようだ。その宇宙人はバット星人。奇しくも俺がつい先日戦った相手と同種族だ。

さらに、そのバット星人を打ち倒し、この星に平和をもたらしたウルトラマンが三人記録に残っているようだ。それが、ウルトラマンダイナ、コスマス、そしてゼロ。これまた偶然にも俺が今までに出会つたり見聞きしたりしているウルトラマンたちだ。

しかし、三人のウルトラマンが平和を取り戻した世界で暴れ回る黒い巨人は許せない。

そうして情報を整理していると、外がにわかに騒がしくなる。何かと思い俺は店の外に出る。

するとそこには一体の黒い巨人が現れていた。新聞に載っていた奴だ。俺はウルトラマンに変身する。そして黒い巨人を見据える。その刹那、ひどい頭痛に襲われた。

「何だ……!?」俺は、この黒い巨人を知っている……!?

新聞の写真で見た時には無かつた頭痛。脳をかき回されるような痛みに耐え、俺は巨人の破壊行為を止める。

しかし！

頭痛が。記憶が。脳が。
痛む！ 痛む！ 痛む！

俺の記憶の深いところにあるそれを、無理やり引っ張り出すように。それは、思い出すにはまだ早い。

俺は自分の失った記憶を考えないように、意識をそらしながら黒い巨人と戦う。俺が光線を放つ。相手も偶然同じような光線を放つが、それを考えない。ただ力を入れ、相手に押し勝つことだけ集中する。光線は相手のそれに打ち勝ち、黒い巨人を爆散させた。

消えた巨人のいた場所に、何か小さなものが落ちた。

気になつて人間体に戻つた後見に行くと、先ほどの黒い巨人を模した人形が落ちていた。さらに、その先には宇宙人が立つている。

「誰だ」

「私はメフィラス星人。この星をいただきに来た」「黒い巨人は倒したぞ」

「予想外だよ。現に、私以外はこの星を知覚できないようバリアを張つていたのにね。心が疲弊した人間たちは、あと少しで絶望し、私にこの星を明け渡しちゃう」

一方。

今頃になつて現れたのか！ ウルトラマン……！

男は地球防衛隊の指令室で怒りをおさえきれずにいた。

気付けば、隊員たちはみな今まで現れてくれなかつたウルトラマンへの怒りに燃えていた。

中途半端な理想と希望を見せ、我々に絶望を叩き付けた、と。頭ではしようがないと、人間の傲慢だと分かっている。

しかし、何故か胸の怒りは収まらず、彼らは気付けば自らの意思とは逆に出動していた。

メフィラスの巨大化に対抗して俺も変身する。すると、メフィラスの姿が消えた。

「ど、どーだー！」

それと入れ替わるように、地球防衛隊の戦車や戦闘機が出現。突如、俺に対し攻撃を始めた。

「な、何だこれは！　俺は敵じゃない！」

すると、頭の中でメフィラスの声が響く。

「私が作戦をすべて君に告げると思つたのかね？　これが万が一の時の切り札さ。彼らの中にいる、ウルトラマンへの不満をちょいとばかし増幅させてもらつた」

メフィラスの話す合間にも、戦闘機や戦車の攻撃が俺の体を傷める。

「くそつ！　人間を操るなんて卑怯だぞ！」

「卑怯もラツキヨウもあるものか！　それに私は操っているのではない。彼らの本能に語り掛けているだけさ」

俺は、戦闘機や戦車に攻撃を加えないようにしながら、メフィラスの場所を探す。しかし、透明になつてしているのかその場所はわからな

い。

すると、ウルトラマンの力で強化された聴力がなにか声を捉えた。

「右だ！　そこに奴がいる！」

意識すると、確かに右にわずかな違和感がある。

そこに光線を放つた。

「ぬああっ！！」

メフィラス星人は消滅。同時に、戦闘機や戦車の攻撃も止んだ。様子をうかがうと、どうやら向こうも困惑している様子だ。

「なぜ我々はウルトラマンに攻撃を……」

「申し訳ありませんでした、ウルトラマンゼロ」

謝つてくる人もいた。ゼロじゃないんだけどな。

先ほど透明化したメフィラス星人の位置を教えてくれた人にお礼を言おうと人間体に戻る。

すると向こうから駆け寄つてくれた。

「俺はタイガ・ノゾム。この世界を救つてくれてありがとう」

「俺はマキ。よろしく」

俺は彼に、黒い巨人と宇宙人を倒したこと、コスモスやゼロと会つたことを話した。

話を聞くと、彼は以前ウルトラマンゼロと共に戦ったという。それも、彼自身がゼロへと変身して。

俺はどうなのだろう。話しかけてこないだけで、ウルトラマンという別の存在と一体化しているのかかもしれない。

タイガは、この世界に平和が戻り感謝していることと、ゼロによろしく伝えてほしいといい、去つていった。

何でも、このことを伝えるべき仲間たちがいるんだとか。

俺も、やるべきことがある。光るペンダントの示す次の目的地へ、俺は飛び立つた。

U p.i n & a m p ; I p.i n , s s p a c e 編 助け求むフォーリナー

胸に下げた赤いペンドント。それが光り指し示す先へ、俺は向かっていた。いくつもの宇宙を超え、やがて伸びた光の終点が見えてくる。そこには、以前と同じく地球が在った。

「とりあえずどこかに降りてみるか」

光の射す大まかな場所に従つて、俺は地球の大地に着地する。巨人化していると目立つてしまふので人間の姿に戻る。人気の無い場所を狙つたからか、人の姿はない。

それでも、街に向かつて歩いていくと、ちらほらと人の姿が見えてきた。ビルや商店が並ぶ街並み。辺りを見渡してみると、この前訪れた地球とあまり変わらない。怪獣や宇宙人の姿も今のところ見当たらない。

「何か事件が起きているかもしない。本や新聞で調べるとしよう」
そう決めて歩き出すと、後ろから何かがぶつかってきた。
「な、何だ!?

そこには、見たところ12歳くらいの少年が息を切らしてしゃがみこんでいた。相当疲れているだろう彼を落ち着かせながら、俺は用件を聞く。

「どうした、なにかあつたか少年」

「ツつ……お兄さん、助けてくれ! 狙われてるんだ!」

少年は焦りを隠さずに言う。

「何に狙われてるんだ!?

俺が聞くと、少年は逃げながら話す、と言つて俺の手を引き路地裏に逃げ込んだ。

「よし……もう抜けたかな」

「少年、一体何が起こつてる? 君はいつたい誰に狙われてるんだ?」

少年は俺に事情を話し始める。

「ごめんごめん。俺はストルム星人のアングел。お兄さんも宇宙人だ

ろ？ 悪いやつに狙われてんだ。助けてくれ

ストルム星人。聞いたことのない宇宙人だ。

「アンゲル、君はなぜ狙われてる？ 理由を聞かせてくれ」

「ああ……たぶん、俺の体の中にある器官を狙ってるんだ。ストルム器官つつってな」

アンゲルの話によると、彼はストルム器官によつて周囲の位相を反転し、エネルギーを変化させられるという。しかし、故郷のストルム星は滅び、売人にとつては貴重なお宝だという。

「人の体を商品扱い……許せない」

俺はアンゲルの両肩に手を置き微笑む。

「俺はマキ。名もないウルトラマンだ。俺がお前を守つてやる」

そういうとアンゲルは非常に驚いた様子でしりもちをついた。

「ウ、ウルトラマンだア！？ まじかッ！」

「ウルトラマンつて、そんなに珍しいか？」

「いや、おれはいくつもの世界を放浪してたけど、どのウルトラマンにも助けてもらつたことなくてさ……」

「いま、宇宙中でロボットが暴れています。ウルトラマンは皆、その対応に追われているようだからな」

「へー。まあ、お兄さんが助けてくれるならいいや。じゃあ、よろしくね」

「あ、待つてくれ。俺は、このペンドントの導きに従つて困つた人を救つてはいるんだが、今回は君を狙つてはいる奴のことだと思う。なにか手掛かりはあるか？」

アンゲルは思案して、情報を話し出した。

「俺がこの世界に飛んできたのは二日前だ。そこで、昨日からもう襲つてきやがつた。二人組の宇宙人だつた。武器はたぶんレーザーガンかな」

「ふむふむ……ン！」

情報交換している俺とアンゲルの間に、レーザーが照射された！
「逃げるぞ！」

銀河救助リブツト

臓器売人に狙われていたストルム星人アングル。彼を救うため、俺は売人たちを調べることに。だが、その矢先に敵に先手を打たれてしまう。とつさに逃げた俺たちは、路地裏を駆使して逃げるのだった。「ど、どうするんだよ！ 相手はレーザーガンを持つてる！」

「とにかく逃げるんだ！」

狭い路地を進み、何度も曲がって方向転換する。そうすることで追手は銃の狙いを定められない。しかし、敵もそこまで馬鹿ではなかった。

「お兄さん！ 止まつて！」

アングルの声に俺はとつさに反応し、足を止める。すると前方に宇宙人の姿が。後ろにも同じ宇宙人。

「挟み撃ちか！ やられた」

二人の宇宙人がレーザーガンを構えて接近する。俺はアングルをかばうようにして宇宙人を警戒するが、絶体絶命だ。狭い路地裏で変身したら、アングルは瓦礫に埋もれてしまう。

「くつ……どうすれば」

その刹那。

キラリと何かが光ったかと思うと、それが宇宙人の足を引っかけ転倒させた。転がり落ちたレーザーガンを俺はつかみ、もう一人の宇宙人に向ける。

「動くな！」

レーザーガンを発射して敵の持つそれを打ち落とす。武器を失った宇宙人に俺は接近し、格闘でぶちのめした。転倒した宇宙人も気絶させておく。

「ひとまず落ち着いたな。しかし、さつきのは……」

そこに、女の声が響いた。

「それは、私のトラップよ！ うまくいったみたいね」

頭上の屋根を伝つて身軽な身のこなしで降りてくる。

赤と黒のスーツを身にまとい、頭は棘のあるヘルメットを装着して

いる。彼女？　がヘルメットを外すと、女の顔が現れた。

「アングエルと同様、地球の人間と似た外見をしている。ヒューマノイドというやつか。」

彼女が名乗る。

「私はキール星人リーゼ。世界を渡り歩いて修行してるの」

「助けてくれてありがとう、俺はマキ。名もないウルトラマンだ。」

「こつちはストルム星人のアングエル」

「よろしく」

「こちらも名乗ると、彼女は先ほどの助力について説明してくれた。

「私は強いやつと戦いたくてね。トラップで敵の強さを測るんだ。でも、あんな弱いのはダメだね」

「どうやら、戦闘に並々ならぬ関心があるようだ。」

「レイオニクスってやつもやつてみたんだけど性に合わなくてね……つて、あれ！」

彼女の指さす方を振り返ると、宇宙人たちが氣絶から復活し、ロボットを呼び出していた！

リーゼがその宇宙人とロボットについて教えてくれる。

「あの宇宙人、ガルメス人だね。それから、あつちのでかいロボットは……バドリュードじやんか！」

「詳しいんだな」

俺が感心している隣で、リーゼは困惑していた。

「何でヴァイロ星人のロボットをガルメス人が……？」

俺は彼女に、いま宇宙で起きて いる異変について話す。

「いま、宇宙の各地でロボットが暴走している。そのことと何か関係があるのかも知れない」

彼女はいま一つ納得して いないようだ。

「ところで、戦闘が好きと言っていたが、あのロボットとも戦いたいか？」

「まさか！　あんなでかいの相手できないよ」

「わかつた。アングエルを頼む」

俺はリーゼに言い、路地を出て変身する。

「えつ？ あいつホントにウルトラマンだつたの!?」

「俺も半信半疑だつたよ」

変身した俺に向かい、バドリュードというらしいロボット型怪獣は超音波攻撃を放ってきた。とつさにかわすが、音波は広がりよけがない。音によるダメージが直接体にしみこんでくる。

「くつ!!」

腕を組んで光線を放つが、固いボディに弾かれる。格闘技も同様だ。

「これじゃ倒す手段がない！」

そこに、一筋の光が現れた。

街の人々が口々にその名を呼ぶ。

「あれは、ウルトラマンリブット！」

「来てくれたぞ、リブットが！」

「リブット頑張れ！」

身体に走る赤のラインと腕の青いクリスタルが特徴的な見たことのないウルトラマンがそこにいた。

人々は彼を「ウルトラマンリブット」と呼ぶらしい。彼は超高速でバドリユードの音波攻撃を避け、切断技リモートカッターで敵の腕を切り割いた。

彼はこちらを仲間と認識してくれたらしく、合図をしてくれた。それにあわせ、光線を放つ。彼もL字に組んだ腕から必殺のギャラクシウムブラスターを放った。

バドリユードは爆散。ウルトラマンリブットと握手を交わす。その一瞬、彼と意思の疎通ができた。彼はこの世界を守るウルトラマンだという。

他に脅威が無いことを確認し、彼は空へと飛び立つていった。

しかし、俺にはまだやるべきことが残っている。

人間体に戻つて、アングエルとリーゼのもとへ向かう。

「大丈夫だつたか！」

「ええ、なんとか」

「平気よ」

二人とも無事なようだ。良かつた。

「ところで、俺はペンドントに従つて次の世界に行こうと思うんだけど、アンヘルはどうする？」

アンヘルは焦つた様子で答えた。

「お兄さんに付いていくよ！ だつて、それが一番安全だろ!?」

「なら、私もついていこうかなー。アンヘルが命狙われてるなら、強いやつがそれだけ寄つてくるつてことだしね」

俺は返答に困る。

「おいおい、三人一緒に移動はできないんだけどな」

宇宙の時空間移動は彼らには危険そうだ。俺の手に乗せていつて万が一落としたらシャレにならない。

すると、リーゼが提案する。

「私の乗つてきた宇宙船で行きましょう。既に空いてるゲートからなら、ちょっと遠回りでも行けるはずよ」

「どうか、アンヘルはどうやって宇宙を移動してきたんだ？」

「それは、なんか宇宙を移動してる変な青いロボットに便乗させてもらつて……」

俺は過去の体験を思い出す。そのロボットはグローカーか。

「なるほど。となると、リーゼの提案が現実的だな。じやあそれで出発しよう」

予想外の新たな仲間を迎えた。俺たち三人は、新たな世界へと出発する。

サイドスペース編

運命——ジード——

名も無きウルトラマンとして目覚めた記憶喪失の男・マキ。彼は胸のペンドントの輝きに従い、これまで五つの世界を旅してきた。

ウルトラマンコスモスが守るコスモスペース。

ウルティメイトフォースゼロが守るアナザースペース。

かつてウルトラマンダイナが守ったネオフロンティアスペース。

過去にバット星人の脅威を退けたヒューチャーアース。

さらに、ウルトラマンリブットの活躍する世界。

旅の中で彼は同行者を得た。

ひとりは、気弱で命を狙われるストルム星人の少年・アンゲル。

もうひとりは戦闘マニアな宇宙人で宇宙船も保持するキール星人リーゼ。

今、三人はリーゼの操縦するエイ型の宇宙船に乗り、銀河を航行している。

「行き先はこっちで合つてる?」

「大丈夫だ。あのワームホールを抜けると別の世界に行けるはずだ」

船の向かう先にペンドントの光が伸びている。

ワームホールを超えての別世界への移動を指示しているのだ。

行き先についてはマキの胸のペンドントに一任されている。マキの目的はペンドントの光に従い人々を救うこと。エンゲルはウルトラマンであるマキに守つてもらうこと。リーゼはアンゲルを狙う刺客と戦うこと。三人は利害の一致からこうして共に旅をしている。三人を乗せた船は、やがてまばゆい光を放つワームホールへと突入していく。

ワームホールを抜けると、再び大宇宙が広がっている。一見他の宇宙と大差ないように思えたが、マキが視界の端に何かを捉えた。

(あれは……)

そこに漂っていたのは、コスモスペースの正義執行マシン、グロー

カーだった。いくつもの宇宙で起きているロボットの暴走により、彼らは様々な世界に移動しているのだ。マキも以前戦つたことがあり、しばらく姿を見ていなかつたが……

「このグローカーは壊れているようだな」

ボディが大きく削れ、頭部の光も消えている。何ものかによつて破壊されたようだ。

「見て、向こうにももう一体いる」

リーゼが指さすその先には、宇宙船と思わしき機械が一機、高速で移動していた。それを、マキの胸のペンドントも指し示している。「あれはグローカーマザー。グローカーの母船で、あの中にはいっぱいグローカーポーンが入つてゐるの」

「ペンドントもあの船を指してゐる。追いかけよう」

リーゼが宇宙船に命令を出し、グローカーマザーを追跡する。当然、相手もこちらに気づいている。母艦から数機のグローカーが射出された。

「俺が行く！」

マキが眩い光と共に巨人・ウルトラマンに変身！ 宇宙船の外に飛び出し、グローカーに向けて光弾を撃つ。射出されたばかりのグローカーポーンはそれを受けて爆散！ しかし数が多く、捌き切れない。

「くつ……」の数は無理だ

マキは船内に戻ると共に変身を解除。リーゼが宇宙船を急発進させ戦線を離脱する。

「あの宇宙船を止めるのは難しい。先回りして迎え撃とう」

グローカーマザーの向かう先に急ぐ。その先には、いくつもの宇宙でマキが見てきた光景があつた。太陽系第三番惑星、地球。

宇宙は違えど、この世界でも狙われる運命にあるらしい。

大気圏を抜け、地球上の開けた場所に着陸する。

グローカーマザーも早く、既に二体ほどのグローカーポーンが投下され、街を破壊している。

逃げ惑う人々をかわし、マキは変身する。

光と共に体は巨大化し、銀色と赤色をまとつた姿へと変化。胸には

ペンドントと同じ形を配している。

遠方のグローカーを確認し、一飛びで接近。素早いパンチで敵をのけぞらせる。

すると、付近で発光が起き、巨人がもう一人現れた。

この世界——サイドスペース——を守る戦士、ウルトラマンジードだ。全身を走る黒、赤、銀の三色のラインと、マキになく他の戦士たちに見られる胸のカラータイマー、そしてつりあがつた水色の目が特徴的だ。

腰を低くした構えの体勢から、瞬時に敵に飛び膝蹴りを喰らわせる。さらに、爪型武器・ジードクローによる斬撃がグローカーの腕を割く。

マキも負けじと敵を打ちのめし、光線技で撃破。ジードは腕を組み、必殺のレツキングバーストで敵を仕留めた。

アイ・コンタクトを交わし、互いに称えあうマキとジード。そこに、グローカーマザーから新たな二体の尖兵が投下される。

二体のグローカーポーンは落下せず、空中で分解し合体。第二形態グローカールークとなつて降り立つた。

「抵抗スルモノハ全テ排除」

無機質な音声でそう呟くルークは、肩、顔、手、足等至る所に刃を持ち、前後のモノアイが三六〇度視界を確保。さらにポーンよりも大型のボディが威圧感を与えてくる。

マキとジードが迫る巨体に応戦するが、地力で押し返されてしまう。

ジードはウルトラの父とウルトラマンゼロの力を併せ持つマグニフィセントへ変化し、グローカールークと正面からぶつかり合う！

強大な力と力の衝突が生む震動波で周囲の建物は大きく揺れ動く。マキはジードを妨害しないよう、グローカールークの背後から斬撃波を放つて援護する。しかし、マキの力が足りず、効果はない。

マキが光線を放つがこれも効果はない。逆にグローカールークは、突然腕から大きな刃を出現させると、隙が生まれたジードを突き刺した。

そのダメージは深く、ジードは一撃で変身解除まで追い込まれてしまつた。

光の粒子が霧散し、消滅するジード。人間大に戻った彼を、その友人であるペガツサ星人ペガが受け止め、ダーク・ゾーンで離脱する。一方、マキは敵の刃をぎりぎりで受け流し、反撃の機会をうかがつていた。

(このままでは……俺もやられる!)

一度身長10m程度の銀色の姿へ戻る。そして巨大な敵の周りをかく乱するように飛び回る!

狙いが定まらずあちこちを向き直すルーカ。その背後から隙をつき、赤色の姿へ! 巨大な身体に戻り光線技を命中させる。

爆風。そして煙が辺りを覆う。

マキが敵影を確認しようとするが、そこから現れたのは敵の大きな刃! ジードと同様に腹部を抉られ、マキもまた変身解除に追い込まれてしまった。

正義——ジャステイス——

マキが気が付くと、そこは見慣れぬ丘だつた。辺りを見渡すと、破壊された街にグローカールークの姿がある。そして、後ろを振り返るとアンゲルとリーゼ、さらにペガツサ星人ペガと少年がいた。

ペガに続き、少年は朝倉リク、ウルトラマンジードと名乗つた。マキたちも素性を明かし、共通の敵を倒すため協力を約束した。

リクが言う。

「僕は一度変身を解除されると二十時間は変身できないんです……他の方法もあるにはあるんですが、ダメージが残つてるのでそれも難しいんです……その間、代わりに街を守つてください！」

「任せておけ、次は必ず勝つ」

勝算は無いが希望を胸に、マキは大きく返事をしようとした、その時……

「マキさん、そのペンダント……!!」

アンゲルが異変に気付く。それは何の前触れもなかつた。まるでそこにそう在るの自然であるかのように。マキのペンダントは「エボルトラスター」へと変化していた。マキは、その使い方も、それが何なのかも知らなかつたが、体の内より沸き上がるエネルギーが教えてくれた。

彼自身を強くするものだと。

エボルトラスターを掲げ、叫ぶ。

「うおおおおおッ!!」

マキの身体が光に包まれ、再び巨人——ウルトラマンへと変身する。しかし、その姿がこれまでと大きく異なつていた。

銀色のボディは鋭さが抑えられ、より洗練された印象を与える。さらに、変身直後にも関わらず、その身長は40mをゆうに超えている。

The Next から Nexusへ……

マキは、この変化によつて大きく力が向上したとは感じなかつた。しかし着実に自分は前に進んでいる——という確証は得た。それは彼の自信へとつながる。

(行くぞッ、グローカールーク!!)

自身を鼓舞し、敵に向かっていく。

そのまま突進。それでもグローカーはびくともしない。馬力が違うのだ。だが、マキは諦めない。何度も街を背にして敵にぶつかっていく。

その姿を見たリーゼは、やれやれ、と言い宇宙船へ。

「何やつてるのさ、こんな時に！」

アンゲルの問いに対し、リーゼは宇宙船から取り出してきたものを見せながら言つた。

「私も協力してやるのさ、あいつに！」

彼女の手に握られているのは、怪獣召喚機・バトルナイザー。

「行つてきて、ガルベロス！」

『バトルナイザー・モンスロード』

リーゼの掛け声とともに、三つ首を持つ巨大なケルベロスタイルのビースト・ガルベロスが出現！ マキと格闘するグローカーに立ち向かっていく。

「すごい！ 怪獣を呼び出して戦うなんて！」

「私が狙われたらアンタの力で守つてよね！」

ガルベロスの鋭利な爪と牙が、グローカーの機械のボディを切り割く！

マキもガルベロスと息を合わせ、敵を追い詰める。

バランスを崩したルークに向けて、マキは組んだ腕から光線を放つ。ガルベロスの放つた光弾と合わせり、グローカールークの体を打ち抜いたのだつた。

—ジード変身解除から九時間後—

マキとガルベロスの奮戦により、グローカールークは破損、沈黙。ガルベロスをバトルナイザーに戻したリーゼと人間体に戻つたマキ、アンゲルの三人は朝倉リクとペガに連れられ、彼らの基地である星雲莊にやつてきていた。

これは移動可能な要塞ネオブリタニア号としての機能も持つ。

ジードの仲間であるシャドー星人ゼナも搭乗してきた。

「敵機はいまだ上空にいる。第二波に備え、こちらもシャドー星の怪獣ガブラを待機させている」

9時間が経過して、グローカーマザーには動きが見られない。マキは念のため、以前グローカーを追っていたウルトラマンコスモスにテレパシーを送った。

ジードの力が回復するのはあと十一時間後。それを待つて、グローカーの母艦・グローカーマザーを叩く。それがマキたちの作戦だ。だが、グローカーは回復の暇を与えてはくれなかつた。

上空で待機していたグローカーマザーが動きを見せる。機体を構成するパーツが瞬時に細かく分解。再構築されていく。

その姿は既に母艦では無く。前方に突き出した形状の頭部。巨大きな三本の爪をもつ腕と巨体を支える大きな足。背部にはバーニア、頭部にはモノアイを装備した最終兵器。

その名はグローカービショップ。それはルークの作業を引き継ぐようにならと街を攻撃する。

作戦通り、リーゼのガルベロスとAIBのガブラ、そしてウルトラマンに変身したマキが迎え撃つ。だが、三つの大きな力が合わさつてもビシヨップのパワーにかなわない。

「さつきのより強い！　このままじゃマキさんが負ける！」

「私のガルベロスでもこれが精いっぱいなんだけど……」

「僕がジードに変身して戦えれば……」

リクが自分の不甲斐なさを悔やむ。

なすすべもなくガブラとガルベロスは蹴散らされてしまい、退却する。

絶体絶命の危機、その時――。

赤き光が、地上を空から照らした。それは、やがて光が薄まるとともに輪郭を露にする。赤き巨人が、そこに立つていた。

正義の執行者・ウルトラマンジャステイス。

先ほどマキがコスモスに送ったテレパシー。それを聞き届けた彼

は自分の世界を守るので手一杯だつたため、ジャステイスにこちらの救援を頼んだのだ。

マキはジャステイスを一度見かけたことがあるが、改めて見るとその体から凄まじいパワーを感じる。

ジャステイスが全身に力を込めると、金色のラインがその体に入る。その姿はジャステイスの強化形態・クラッシャーモード。

片腕を前に、もう片方を上に向けた構えを取ると同時に、スライドするような高速移動！両腕を移動と同時に前に突き出し、そのままビショップの腕部を爪ごと破壊した。

損傷によるビショップの隙をつき、ジャステイスは朝倉リクにエネルギーを分け与える。リクの体のダメージが回復していき、変身に制限のない唯一の形態への変身を可能にする。

「これなら変身できる！」

リクはギガファイナライザーとジードライザーを構え、ウルトラマンジードへと変身する！

「ウルティメイトエボリューション！」

『アルティメットエボリューション！』

変身にも使用したギガファイナライザーを武器として構え、マキ、そしてジャステイスとともに並び立つ。

ここに三人のウルトラ戦士が並び立った。

ビショップは頭部のモノアイからビームを出して三人を牽制しつつ、バニアによる体当たりを仕掛ける。マキがそれを受け止め、ジャステイスとジードが必殺の一撃を放つた。

腕による機構を失つたビショップは攻撃を打ち消しきれず、押し負ける。

マキが離脱した直後、衝撃を受け切つたグローカービショップは爆散！

グローカーによる脅威から街を守つたのだ。

ビショップを倒した後、人間体に戻つたマキとジード。ジャステイスはそのまま別の宇宙に帰つていつたようだ。

「この星を救ってくれてありがとう」

「いや、こちらこそ」

朝倉リクと固い握手を交わすマキ。丘の上で、アングエルとリーゼが手を振っている。

「じゃあ、俺はもう行くよ」

まだ宇宙にはグローカーのように暴走するロボットがいるかもしない。さらに、変化を起こした自分自身のことについても——マキは決意を新たにし、再び出発する。新たな旅路へ。

綾香市編

白銀 —アンファンス—

日本のあるどかな街、雲が丘。ここに不思議な怪異が発生していた。街のど真ん中に突如、巨大な穴が出現したのだ。調査に向かつた特捜チームUPGの面々がそこで見たのは、宙に浮かぶどす黒い虚空うろだつた。

モノを投げ入れると、それは跡形もなく消え去ってしまい、偵察用のドローンは内部で破壊された。その近辺を封鎖し被害の拡大を防いだが、その虚はどんどんと大きくなつていく。どうしたものかと頭を悩ませるUPG。

そこに、宇宙から宇宙船が飛来した。

宇宙船の中から現れたのは、三人の地球人に酷似した宇宙人。ストルム星人の少年。キール星人の女性。そして、ウルトラマンと名乗る青年。

三人は、光に導かれてこの世界にやつてきたという。

「それで、その虚がこれですか」

「なんだか、ブラックホールみたいですね」

一通り虚空とにらめっこした青年は、おもむろに小型の銃を取り出し、虚に向けてエネルギー弾を発射した。変化が起こらないのを確認すると、連れの二人に振り返る。

「俺はこれから、あの中を調べに行く。一人はどうする?」

「私は嫌。戻つてこれないかもしないし、宇宙船を置きっぱなしにはできないでしょ」

「僕は行きます、マキさんに守つてもらつてるので、少しでも恩返ししたいです」

「じゃありーゼ、留守番よろしく」

そういうとマキと呼ばれた青年は短剣状の物体を取り出し、鞘から抜く。すると剣先から光があふれだす。瞬く間に、青年は白銀の戦士になつた。

少年を担ぎ上げ、戦士は暗黒の内部に入していく。

闇による漫食をかわし、暗黒の空間の奥へ進んでいくマキ。彼の視界の前方に、うつすらと光が見えてきた。

その方向へさらに進むと――

そこには、もう一つの街があつた。先ほどまで二人がいた世界とどこか違う。例えば、街並みが違う。特捜チームではなく、警察がこの虚を監視している。そして、その警察は二人の出現にひどく困惑している。

アングエルが気付き、マキにこつそり耳打ちする。

「さつきの街、雲が丘つて名前でしたよね。こつちは違う町のようです。ほら」

アングエルが指し示した先には、「綾香市」の文字。

違う町同士が、この虚を通してつながっているのだ。マキは、エボルトラスターを見る。すると、先ほどまでこの虚に伸びていた光は、どこか遠くに向かつて伸びている。今回の目的はこの虚を解決することではなく、それを通つた先にあるこの街にあつたようだ。ひとまずこの場を離脱しようとアングエルを抱えて空に飛び立つマキ。

すると上空から見える山中に、昼間にも関わらず、人目をばばからずに訓練している巨人を発見した。

「なんだ、あれは……」

赤銀——ジュネツス——

「他の世界から来た宇宙人さんですか!?」

どうやら別の世界というものに、この世界の住人はなじみがないらしい。というか、普通はそうなのだろうか…とマキは思う。

マキとアングエルは山中で巨人を発見し、声をかけた。彼女の名は湊アサヒ。ウルトラウーマングリージョとしてこの街を守る巨人だそうだ。二人は、木々の見えるカフェで彼女に、この世界や虚について聞いてみるとことにしていた。

「そうですねえ…あの黒い穴は最近できただんですけど、警察のひとが見張っていて私やお母さんも調べられていないんですよね…」

「そうか…他に変わったことは?」

「いいえ、最近は怪獣も現れませんし…ところで、あなたはなんて巨人なんですか?」

「ああ、俺は…名も無いウルトラマンだ。」

「え、名前、ないんですか?名前は大事なものですから…名づけるべきです!」

「ああ、考えておくよ…」

「結局、収穫はなかつたな」

「でも、マキさん、その光を追つていけば何かわかるんじゃないでしょうか」

「そうだな、行つてみよう」

アサヒと別れ、二人は綾香市を光が射している方角へ進んでいく。しばらく歩いていくと、だんだんと人気の無い道に差し掛かっていく。警戒しながら歩みを進める二人。すると、どこからともなく光弾が飛来!

アングエルがとつさにストルム器官による位相反転を行う。それにより逆位相となつたアンチ化光弾が敵のもとに跳ね返る!

敵もすかさずかわすが、その際に二人は姿を確認した。メフイラス星人だ。

「以前、倒したはずじや…」

「幻影は私の得意分野さ」

フューチャーアースでスパークドールズの黒い巨人を使役していった宇宙人だ。

「私のダークファウストでは力が足りなかつたようだからね…」
ダークファウスト。その名前を聞いたマキは頭に小さな違和感を抱くが、すぐさまかなぐり捨てる。

「次はこいつだ」

メフィラスはダークスパークを使い、次なる闇の巨人を召喚する。
「いでよ、ダークメフィスト」

建物を破壊し、黒と赤の巨人が出現する。その漆黒の目は、先ほど見た虚のように、あらゆるものを受け込みそうだ。

腕には鋭利なダガーを持ち、こちらの体をえぐり取らんと待ち構えている。マキは変身し、銀色の姿を見せる。巨人と相対したとき、マキは再び頭に違和感を覚える。

——俺は、以前この黒い巨人と戦ったことがある?——

そのとき、頭に強烈なイメージが浮かび上がる。

それに従い、マキは腕に力を込め、力を振り絞る。

すると、体が赤く光り、赤い巨人へと変化を遂げた。マキは自分の力が先ほどよりも高まっているのを感じた。

「行くぞ! ダークメフィスト」

発破をかけてマキは走り出す。赤い巨人と闇の巨人の一騎打ちが始まつた。

雲が丘編

勝利 —ビクトリー—

悪魔・ダークメファイストのダガーが振り下ろされ、マキの赤き体躯を切り刻まんと迫る。それを紙一重でかわし、その勢いで回し蹴りを繰り出し反撃。両者譲らない攻防が続いている。

二人の巨人は同時にキックを繰り出し、足と足がぶつかり合つて火花を散らす。

その様子を固睡をのんで見守っていたアンゲルのもとに、光弾が飛んでくる。

「わっ!? なんだ!?」

みると、視線の先にはメフイラス。ダークスパークを使って攻撃を仕掛けてきたようだ。その剣先から禍々しい色の光弾が発射される。アンゲルは体の奥に力を込め、精神を集中させる。

「はあっ!!」

ストルム器官が活性化し、光弾をメフイラスのもとにはじき返した。

「ぐおっ!! きみは、厄介な術を使うな……」

メフイラスは戦う巨人たちをよそに、先ほどマキたちが通つてきた虚と同様のものを召喚した。そして、それを使って逃亡しようとする。

「待てッ！」

しかし、アンゲルには攻撃手段がない。追撃することはかなわず、メフイラスを逃がしてしまった。しかしメフイラスが通つた後、その虚は残り続けていた。

「これを通れば……」

マキは高速でダークメファイストに接近し、光弾を喰らわせる。ダークメファイストの反撃が来るがそれをパンチでねじ伏せる。怯んだメフィストに立ち直る暇を与えずに追撃。以前と比べ破壊力の上昇した必殺光線を放つ。

ダークメファイストの左半身が吹き飛び、そのまま悪魔は消滅した。
マキはメフィラスの逃亡を感じ取っていた。急いでアングエルを連れ、虚に飛び込む。

「この虚もメフィラスの仕業だつたのか……」「二つの街……二つの世界をつないで、何をするつもりだつたんだろ
う」

元の世界に戻ると、それはもと来た場所と離れたところであつた。虚を見てやつてきたりーゼとＵＰＧの隊員たちが駆け寄つてくる。

「おかえり、一人とも。さつきの場所にあつた虚は消えたよ。突然新しくここに虚ができたみたい」

「ここから出てくる宇宙人を見なかつたか!?」

ＵＰＧの隊員が答える。

「こちらの虚の反応をキヤツチして、すぐに彼に向かつてもらいまし
た。不審な宇宙人が居れば、取り押さえていると思いますが……」

「彼とは?」

「ええ、地底世界の住人であるビクトリアンの戦士です。名はショウ」
周囲を探ると、近くから剣戟の音が聞こえる。マキたちはその方向に向かう。すると、そこには、ビクトリアンのショウと、戦闘用のアーマーをまとつたメフィラス星人の姿があつた。

ショウはただの木の棒で、メフィラスの持つ鋭利な刃を打ち払つていた。

「俺も加勢するッ!」

マキは、ショウを手助けするべく駆けだしていつた。

銀河 —ギヤラクシー—

アーマードメフィラスは剣を自在に操り、ショウとマキの攻撃を華麗にいなしていく。逆に、メフィラスから一人に向けての反撃は少ない。一見メフィラスが押されているようにみえるが、そこにはメフィラスの策略が見え隠れする。

「なぜ反撃しない!?」

「フツ……気付くのが遅かつたな、ウルトラマンギンガは今頃闇の戦士たちに倒されているぞ」

「なんだと!?」

ショウが驚きの表情を見せる。

UPGの隊員の一人・礼堂ヒカルは、太平洋から発せられた謎の救難信号を受け、数日前から調査に出ていた。船でそのポイントに近く、地図にはない島が見える。

船員に礼を告げ、船を降りる。荷物を置き、辺りを確認する。

島は草木があまり見られず、草原が一面に広がっている。そして、前方の景色は何やら薄暗い霧で覆われ、遠くまで見渡すことができない。

「どうなつてんだ、これ……」

しばらくすると、霧がどんどんと晴れてくる。見えてきたのは、巨人の足。それも、ひとりや二人ではない。

目を凝らしたヒカルは、五人の巨人を確認した。

「何だ、お前らは!!」

霧が完全に晴れ、巨人たちの正体が明らかになる。

ウルトラマンタロウのコピーボディ・カオスロイドT。

ウルトラセブンのコピーボディ・カオスロイドS。

ウルトラマンのコピーボディ・カオスロイドU。

暗黒破壊神・ダークザギ。

暗黒魔人・ダークルギエル。

全員、ウルトラマンギンガと戦い、そして倒された闇の戦士たち。

それを、メフィラス星人が別の世界とのはざまからエネルギーを引き出し蘇らせたのだ。

「お前ら、蘇ったのか……だが、好きにはさせねえぜ!! 行くぞギンガ！」

『ウルトライブ！ ウルトラマンギンガ』

「ギンガ————ツ!!」

水色に光り輝くクリスタルを纏う、未来の戦士・ウルトラマンギンガが島の大地に降り立つ。

それを、闇の戦士たちは五人がかりで取り囲む。

メフィラスは隙のできたショウの足を払い、マキを剣で攻め立てながら言う。

「さすがのギンガも、闇の精銳五人相手では生きて帰ることはできまい!!」

「ギンガコンフォート！」

緑にクリスタルが光り、辺りの闇の霧が完全に消える。そして、体に火を纏い向かつてきたカオスロイドTに向き直る。

「ギンガサンシャイン！」

クリスタルが桃色に光る。両手からの破壊光線でカオスロイドTは粉々に吹き飛んだ。

後ろから飛んできたカオスロイドSの分裂する刃を、クリスタルを白色に光らせ発動するギンガセイバーで打ち払う。

「ギンガセイバーッ！ その技は見切つてるぜ!!」

敵の額からのビームをギンガは腕で弾きながら、クリスタルは黄色に発光。

「ギンガサンダー・ボルト!!」

雷光が叫び、カオスロイドSは一瞬にして空中で爆散。同時にカオスロイドUが腕を分離させて放つた巨大ウルトラスラッシュがギンガを狙つて接近。

「ギンガファイヤー・ボール！」

赤きクリスタルの光とともに放たれる火球が迎え撃つ。

火球で打ち碎かれ腕が返つて来ず、狼狽するカオスロイドUに向
け、ギンガはダツシユで接近。クリスタルを紫に光らせ、頭部から光
の刃を放つ。

「ギンガスラッシュユ！」

片腕で放つカオススペシウムを押し返され、カオスロイドUもあえ
なく爆発。

ここまで数十秒の早業で、ギンガは三体の闇の巨人を葬った。

降星町編

破壊神——ザギ——

三体のカオスロイドを撃破したウルトラマンギンガは、地図にない無人島でダークザギとダークルギエルを相手に戦闘を繰り広げていた。

武器である槍・ギンガスパークランスを構えて二体の闇の巨人を牽制。しかし、敵の力も強大だ。

先ほどの三体とは桁違いの能力を持つ彼らに、ギンガはいささか苦戦を強いられていた。

ダークザギは未来予知と瞬間移動を織り交ぜた連撃で、ギンガに攻撃をさせず避ける隙も与えない。

ダーカルギエルはダーカスパークランスを用いてギンガと槍術のぶつけ合いを行う。その実力は互角だが、そこにダークザギの追撃が入ることでギンガの攻撃姿勢を崩していく。

しかしギンガの逆転が始まる。体制を崩された時の回転エネルギーを勢いにして、槍をルギエルの槍に引っかけ、共に弾き飛ばす。さらに、ダークザギが次元移動しようとする隙をつき、高速キックでダメージを与える。付け焼刃のコンビネーションを崩したギンガは、青くクリスタルを光らせるとともに必殺光線必殺光線を放つ。

「ギンガクロスショート！」

ダークザギは円形のバリアであるザギ・リフレクションを張り、そのバリアが食い止める隙に瞬間移動でギンガの後ろに回る。

ダークザギはギンガの背後から必殺の破壊光線、ライトニング・ザギを放つ。しかし、振り返ったギンガのクリスタルは眩い虹色に輝いていた。

ライトニング・ザギを圧倒し押し返すほどの熱量が放たれる。全身から放たれる、ギンガ最強の技。

「ギンガエスペシャリリー！」

ダークザギは自身のエネルギーを開放するザギ・ザ・ファイナルを

決死の覚悟で放つも、ギンガの光線に飲み込まれる。ルギエルもダークルギエルビートで応戦するが、つばぜり合いするも押し返され、ついには光と共に消えた。

五体の闇の巨人を撃破したギンガは礼堂ヒカルの姿へと戻った。彼はそこに落ちていた五つの人形を発見。

「これって……スパークドールズ！ つつーことは、コイツらを操つてるやつが他にいるってことか!? ショウに知らせねえと!!」

超スピードで空を駆け、ギンガは雲が丘の方向へ向かう。しかし、その途中、ヒカルの故郷である降星町に巨人の姿が見える。

「何があつたんだ!? あれは……」

そこでは、巨大化したアーマードメフイラスに対抗し、ショウとマキが巨人となり戦いを繰り広げていた。

アーマードメフイラスは二対一の状況を不利と悟り、ダーカスパークを構える。

「出でよ、闇の巨人！」

『ダークライブ！ ダーカメファイスト ツヴァイ！』

名前 —ネーム—

召喚された新たな闇の巨人・ダークメフイスト ツヴァイと、鎧と剣で武装したアーマードメフイラス。

対するのはシェパードンセイバーを構えたウルトラマンビクトリート、銀から赤い姿へと変身した巨人の姿のマキ。

そこに、ウルトラマンギンガが帰ってきた。

メフイラスがそれに気づき、驚愕の声を上げる。

「馬鹿な……闇の軍勢はどうしたのだ!?!」

「あいつらなら、俺が全員倒してきたぜ!-」

「なんだと……ええい!」

メフイラスが光弾をギンガに放つ。

「ギンガハイパー・バリアー!-」

ギンガの手前に円状のバリアーが広がり、メフイラスの光弾は防がれる。

「行くぜ、二人とも!-」

「おう!-」

「あ、ああ!-」

ヒカルの掛け声とともに、二人も敵に向かっていく。

メフイラスの剣はギンガスパークランスとシェパードンセイバーによつて弾かれ、無防備な状態に。

そこに素早く、ビクトリーがビクトリーナイトとなり接近。

ナイトティンバーとシェパードンセイバーの二刀流で斬撃を放つ。

「ぐおおつ!!」

ダメージを受け、メフイラスのアーマーが破壊される。

マキはダークメフイスト ツヴァイのクロ一による連撃を紙一重でかわし続ける。そして、光弾を避けて空中へ。

空から見下ろす形になつたマキは、そこから連續で光弾を放ち、ツヴァイを追い詰める。急降下して接近。回避行動で体力を消耗したツヴァイの懷に飛び込み、エネルギーの光刃を放つ。

ツヴァイは零距離からの高速斬撃を避けられず、真っ二つにされて

人形体へと戻った。

アーマーが破壊されたメフィラスは逃亡を図り、再び時空の虚を出現させる。しかし、ギンガビクトリーが逃げる隙を与えない。

「ウルトラタツチ！ ギンガ！ ビクトリー！ ギンガビクトリー！」

二人のウルトラマンが合体し、新たな戦士・ギンガビクトリーが出 現する。

「ウルトラマンネクサスの力よ！ オーバーレイ・シュトローム！」
「オーバーレイ・シュトローム！」

光線を当てた相手を分子分解させる強烈な必殺光線が、虚に炸裂する。時空の狭間は光線を浴び、メフィラスが通る間を与えず消滅した。

逃げ場を失つたメフィラス。そこに、マキがどどめの光線を放つ。それは、先ほどギンガビクトリーが放つたものに酷似していたが……メフィラスは消滅。小さな町に再び静寂が戻った。

「ありがとな、ウルトラマンネクサス！」

ヒカルが明るくマキに声をかける。それにマキは疑問符を浮かべた。

「ネク……サス？」

「ん？ あんた、ウルトラマンネクサスじゃないのか？」

「わからない……記憶を失つていて」

「そうか……戻るといいな！」

「ああ」

マキはショウ、そしてヒカルと固く握手した。

光が新たな行き先を示す。マキとアンゲル、リーゼはその星を出发。次なる世界へと向かった。

今回の事件で、マキは以前別の世界で戦つたメフィラス星人を倒すことができた。

しかし、まだ解決していない事件がある。多くの宇宙で発生してい

たロボット暴走事件だ。

自分の記憶や出生の謎と立ち向かいながら、この事件を解決できるのか……マキは少し不安になる。だが、それぞれの宇宙で平和を守る戦士たちのことを考えると、不思議と落ち着くのであった。

コンピュータワールド編

覚・醒 —アクティブ—

いつものように光を追つて、三人を乗せた宇宙船は航行していた。

時空の狭間を超えてギンガとビクトリーのいた世界から離れ、別の世界に突入する。光が伸びていくその先へ進むと、宇宙空間に時空の乱れが確認できた。

そこには一人のウルトラマンが居て、その空間を見ていた。

宇宙船とアングル、リーゼをそこに待機させて、マキは変身。巨人の姿へと変身した。そこにいたウルトラマンに声をかける。

「あの、あなたはいつたい？」

「ああ、私はウルトラマンXというものだ。君は……ウルトラマンネクサス？」

Xと名乗るウルトラマンは、マキの正体を知つていていたようだつた。

「実は、記憶が無くて……でも、たぶんそうだ。ところで、これは？」

「ああ、この宇宙は私が普段守っているのだが、数日前からこの辺りに時空の歪みが現れていてな。調査しているうちにここに行きついたというわけだ」

そこは電波の乱れのように、プラズマ波が漏れ出ており、二人に近づき難い印象を与える。

「この電波は宇宙の航行や近隣の星々、生命体に悪影響を与えるだけでなく、他の宇宙とつながってしまう可能性もある。早急に解決すべき事案だ」

「俺も協力する」

Xの説明を聞き、マキが提案する。

「それはありがたい。だが、この中の空間は一種の電子空間になつているようだ。何が起こるかわからないぞ」

「ああ、わかっている」

「サイバーゴモラアーマー アクティブ」

電子音声とともに、Xの上半身にアーマーが展開され、その腕部の

巨大な爪で空間が切り割かれる。

「行くぞ、ネクサス！」

「ああ！」

そして、未知の空間へと入り込んでいく――

マキが目を覚ますと、そこには一人の青年が立っていた。

「大丈夫かい？ 僕は大空大地。Xとユナイト――一体化している。君がウルトラマンネクサス？」

「ああ、俺はマキ。よろしく」

二人が辺りを見渡すと、そこには平凡な街が広がっていた。

「電子空間の中にこんな町が……しかも、人が生活している」

電車も人も活動している。そこには、現実世界と何ら変わらない世界があつた。

しかし、この世界の何らかの異変が、外の世界に影響を及ぼしている。それを見つけなければならない。

「手分けしてこの街の人聞き込みをしよう」

そう言つて大地とマキは別行動を始めた。

街には高層ビルが立ち並び、かなり栄えている街だと見当がついた。この中から異変を見つけるのは困難だ。

しかし、マキには目的を指示する光がある。エボルトラスターを取り出してそれを確認すると、どうやらそれは一軒の店に続いているようだつた。

店名から察するに、リサイクルショップのようだが……

「絢 JUNK SHOP」

騎・士　—ナイト—

エボルトラスターの光が射す先にあつたのは、ごく普通のリサイクルショッピング「絢 JUNK SHOP」だつた。

マキは深呼吸して、異変の原因を突き止めるため店内に入る。

店の中はジャンクショップ兼喫茶店という感じで、昼前であるこの時間、客がいる様子はない。

カウンターの向こうには若そうな女性の店主が居た。

「いらっしゃい、何にしますか？」

気さくに声をかけられる。

「いえ、少し探し物を」

そう言つてエボルトラスターを覗き見る。その光は、上の階を指していた。

「ん？」

上から誰か降りてきた。短めのスカートに整えられたショートヘア、透き通るような青い目。その少女に、光はまっすぐ向かつていた。
「えつと……何？」

突然客に光をあてられたのだ。不機嫌そうに少女が顔をしかめる。

「えつと、これはだね……」

どう説明したものかと悩んでいると、外で大きな破壊音が聞こえてきた。

「なになに!？」

慌てる少女や店主と共にマキは店を飛び出す。すると、空に浮かぶ魔法陣から巨大なロボットが出現している！

大空大地は、エクスデバイザーから発せられるXのナビゲートに従い、不審な電波の発生源へやつってきた。そこには、宇宙人の姿があつた。

「何者だ！　正体を現せ！」

鍛え上げた近接格闘術を用いて、宇宙人に奇襲をかける。しかし宇宙人も、素早い身のこなしでそれを回避。さらに、周りの時空を歪めた。

て大地を吹き飛ばす。

「な、何だこの力は……」

戸惑う大地にXが解説する。

「大地、こいつはチエーン星人だ！ コンピュータ世界の存在を実体化させる力を持っている！」

「その力を使つて、この世界で何かしようと企んでるのか」

二人に向けチエーン星人は言い放つ。

「気づいたところでもう遅い。出でよ、ギヤラクトロン！」

チエーン星人が空に手を振りかざし合図すると同時に、空に魔法陣が出現！

「何だ、あれは！」

魔法陣の中から姿を現したのは、白い色を基調としたボディで包まれた、鋼鉄のロボット兵器・ギヤラクトロン！

その出現に街はパニック状態となる。

「ギヤラクトロン！ この街を制圧しろ！」

「チエーン星人がこの世界に入介入したことで時空が歪んでいたようだな……しかし大地、先にあのロボットを止めるぞ」

「ああX。ユナイトだ！」

大地がエクスデバイザーを構える！

「ウルトラマンXとユナイトします」

そう電子音声が告げるや否や、大地はエクスデバイザーを掲げ叫ぶ。

「エックス——ツ!!

「X ユナイテッド」

サイバー空間に稲光を巻き上げ、ウルトラマンXが顕現した。

ギヤラクトロンがその体を光らせ、攻撃態勢に入る。Xはそれを見逃さず、サイバーカードをロード。

「サイバーベムスターアーマー アクティブ」

盾形のアーマーを出現させ、ギヤラクトロンの攻撃を受け止める。

さらにそれを「ベムスタースパウト」として弾き返す。

しかし、その直後Xは背後から攻撃を受ける。

「がっ！ 今度はなんだ!?」

そこには、もう一体のギヤラクトロンの姿。

さらに遠方には、強化型ギヤラクトロンであるMK2の姿もある。

「いつたい何体いるんだ!? きりがないぞ！」

マキはリサイクルショットの二人を避難させ、変身する。

さらに、銀から赤へ姿を変え、ギヤラクトロンを止めに入る。何発ものレーザー攻撃を次から次へと弾き落とす。しかし、多勢に無勢。10体を超えるギヤラクトロンの軍勢をさばききれない。

「このままでは、街に被害が！」

そのときだつた。ビルの影から紫の影が出現。忍者のような素早

さで次々とギヤラクトロンをエネルギー波で切り伏せていく。

さらに、エネルギー波、光弾も使い分け、辺りの敵を一掃。

ついでに構えていなかつたマキにも光弾がかすつた。

「いてっ！ お、俺はこいつらの仲間じゃない！」

Xが聞く。

「君はいつたい……」

紫の戦士が動きを止め、言う。

「俺はこの街を守る騎士……グリッドナイト」

邂・逅 —エンカウンター—

コンピュータワールドで悪事を画策していたチエーン星人。彼が呼び出したギャラクtron軍団が街を襲う！

人々を守るため大空大地＝Xとマキ＝ネクサスがウルトランとなりて戦う。しかし、その数に圧倒され苦戦を強いられる。そこに、紫の戦士・グリッドナイトが現れた――

「俺はこの街を守る騎士……グリッドナイト」

グリッドナイトはそういうと、ギャラクtron MK2を視界にとらえ、高速でその方角へ向けて駆ける。

エネルギー波や光輪を放つて牽制するも、MK2はそれを装甲とバリアで的確に処理。逆に斧を投げつけ反撃する。

グリッドナイトはそれを素早い身のこなしでかわし、上空から必殺光弾・ナイト爆裂光波弾を放つた。

これはMK2のバリアを破壊。

「今だ大地！」

「ああ！」

バリアの破壊により隙が出来た。そこを見逃さずXが必殺光線を放ち、マキもそれに続く。

「ザナディウム光線！」

二つの光線がMK2の胴体と頭を突き破り、破壊する。

稼働機能を停止したMK2は他の個体と同様に爆散。巨大な破片を破壊し、周囲の安全を確保してから、Xとマキ、そしてグリッドナイトは人間の姿に戻る。

「君がこの世界を守っている戦士なのか、俺はマキ。よろしくな」

「フン」

鼻であしらわれてしまう。見たところ小学生か中学生くらいにしか見えない白髪の少年が、グリッドナイトの正体だった。名前はアンチ、と言いうらしい。なんでも、この世界は以前も外の世界の侵略者に

攻撃されたことがあるらしい。

「そういうえば、ジャンクショップの店の少女がこの事件とかかわりがあるようなんだが、何か知つてるか？」

「なに？　あいつが……」

アンチとその少女は知り合いだつたようで、取り次いでもらうことにして。話をかいつまんで説明してもらう。

「じゃあ、さつきのロボットは新しい侵略者つてこと？」

六花と名乗つたジャンクショップの少女が聞く。

「そうだ。そして、君にも何か関係があるらしい。何か心当たりはないか」

彼女は考え込む。すると、アンチが口を開く。

「アイツの一番のお気に入りだからじやないか」

「アイツ？」

マキが聞く。

「新条アカネ。この世界を作つた……いや、今はいい。とにかく、アイツは現実世界の人間だ。しかし、コンピュータワールドともつながりがないことはない」

「それで、六花さんを媒介に侵略者はこの世界に侵入した？」

大地が推測する。

どうやら、この世界の現実世界とコンピュータワールドには微弱なつながりがあり、チエーン星人はそこを利用して侵入してきたというのだ。

エボルトラスターが追跡していたのはその残滓だつたようだ。

六花に別れを告げ、ジャンクショップをでる。アンチ、マキ、大地の三人はチエーン星人を追うためにXの道案内を聞くことにした。

「しかし、そうと分かればチエーン星人を倒すだけだな」

マキが言うが、Xは何か思うところがあるようだ。

「アンチ君。以前この世界に侵略者がいたと言つたね」

「ああ……それがどうかしたか」

「いや……先ほどのロボットはチエーン星人のものではない。チエーン星人の真の力は、コンピュータ内の怪獣を実体化させることだ」

「なに？」

「もしも以前の侵略者や怪獣のデータがこの世界に少しでも残つたら、現実世界が危ない」

「そうなる前に、アイツを叩く」

Xの指示で三人が向かうと、チエーン星人の陰謀の痕跡が見て取れた。

「つい数刻前までここにいたな……近いぞ」

ふと見ると、遠方にチエーン星人の姿が。

「逃がすかっ！」

アンチが優れた身体能力を発揮し、一瞬で敵の近くまで跳躍。蹴りを入れてノックダウンさせた。

実・現 —リアアライズ—

ジャンクション屋の少女・宝田六花を媒介としてコンピュータワールドに侵略を仕掛けるチエーン星人。その企みを止めるため、マキ、大空大地とX、アンチの4人はチエーン星人の居場所へ急行。アンチが敵を蹴り倒したが……

「こいつは気絶してるぞ」

アンチが確認する。しかし、Xは磁場の乱れを、空気の”ノイズ”を感じ取っていた。

「いや……遅かつたようだ、来るぞ！」

そう言うのと同時に、巨大な怪獣が実体化する。

「あれは……!!」

アンチが驚きの声を上げてみたそれは、以前新条アカネが作り出した怪獣・グールglasだった。

Xが声を張り上げる。

「急いで発生源を止めるんだ！ どんどん怪獣が出てくるぞ！」

すぐに次の怪獣・デバダダンが出現。

「俺は怪獣を止める！ そつちは任せたぞ！」

アンチがグリッドナイトとなり、怪獣に向かっていく。再生怪獣を撃破したことのあるアンチは、手際よく怪獣たちを撃破。しかし、それを上回るスピードで怪獣は出現する。ゴングリー、バジャック、ナナシ……

「こいつは、少しばかりきついな……」

一方、怪獣出現の原因を追うマキと大地。Xが不規則な磁場の乱れを観測し、それを追う。

「まだか!?」

「いや、近いぞ！ あと数メートルだ！」

追いかけた先にいたのは、先ほど倒したばかりのチエーン星人だった。しかし、その左半身は色が無くなっている。

「どういうことだ!?」

マキの驚愕の声にチエーン星人は答える。

「私は双体宇宙人……右は力を、左は頭脳を司っている……だが、先ほどその片方は切り離した！ 軟弱なレフトは不要」

どうやら、先ほど気絶させたのは分裂した左のチエーン星人だつたようだ。

チエーン星人は続ける。

「私が倒れぬ限り、怪獣は出現する！ そのようにレフトがこの世界を弄つた……だが、俺は軟弱なレフトと違うぞ」

そう言うとマキに瞬時に接近し、後ろ回し蹴りを喰らわせた。

「がはっ……!! こいつ、速い！ しかも、パワーも桁違いだ！」

大地は様子を窺う。とてもじゃないが、常人の身体能力ではチエーン星人には勝てない。すると、大地の持っていたサイバーカードがひとりでに動き出した。

「X、これは!?」

「大地！ サイバーカードが、自律移動している！ エクスデバイザーをかざすんだ！」

エクスデバイザーを胸の前でかざすと、そこに吸い込まれるようにサイバーカードたちが読み込まれていく。

「サイバーゴモラ リアライズ」

「サイバーエレキング リアライズ」

「サイバーベムスター リアライズ」

「サイバーゼットン リアライズ」

驚くことに、一度に四体ものサイバー怪獣が出現した。巨大な怪獣・ゴーヤベックに一丸となつて向かっていく。

Xが理解したように言う。

「そうか……この世界は現在、我々の世界に侵食している……つまり半分はサイバーワールドとも言える状態だ。だから、サイバー怪獣たちは自然な行動として実体化……リアライズしたんだ！」

大地がグリッドナイトに向かつて叫ぶ。

「交代しよう！ 怪獣は任せてくれ、こっちの宇宙人を頼む！」

グリッドナイトが領き、アンチの姿へ戻ると同時に、大地はXとユ

ナイトする！

「エクシードX！」

アンチは既に三体の怪獣を撃破しており、残すはゴーヤベックのみだ。

Xとサイバー怪獣たちが並び立つ。

「行くぞみんな！」

サイバー怪獣たちは大地の声に合わせ、それぞれ必殺光線を発射。Xはエクスラッガーを装着した額から、七色の光線を放つ。

「エクスラッガー・ショット！」

ゴーヤベックの体は光線の束に貫かれ、ボロボロと崩れ落ちていった。

怪獣特有のたぐいまれなる身体能力と、マキのエボルトラスターの援護を受け、アンチはどんどんとチエーン星人を追い詰めていった。

「ぐほうつ……こんな……ところで……」

「終わりだ！」

最後はアンチの回し蹴りを受け、ライトはレフトと同じように気絶したのだつた。

「助かった」

アンチが言つた。

大地はXと共に、チエーン星人を宇宙警備隊に引き渡すという。

マキは、アンチと大地、Xに別れを告げ、リーゼとアングルが待つ宇宙船に戻るため、このコンピュータ世界を飛び出す。そこには、現実世界と変わらぬ平和な風景が広がっていた……

ウルトロピア編

任務 —ミツショーン—

闇の中で誰かがささやいた。

「メフィラスもエーレンも、何者かによつて倒されました。まるで、我々の存在を知つてゐるかのように……」

「ふむ。しかし、おまえとアイツが残つてゐる」

囁きに、禍々しい声が答える。

「おまえは機械を暴走させておけばいい。儲けはすべて、お前にやるとも言つた」

「は、はあ」

「いざとなれば私が出向いて消す。だが、その前にアイツが始末するだろう」

禍々しい声の持ち主はそう言い、配下の前で不敵に笑つた。

——ウルトラマンゼロによると、最近きまざまな並行宇宙で同時に異変が起こつてゐるらしい——

闇の巨人の出現、コンピュータ世界のハッキング、ロボットの暴走

……

私がゾフイー隊長に呼ばれたのは、そんな折だつた。

「どうしました、隊長」

「うむ、これを見てくれ」

挨拶もそこそこに、ゾフイー隊長は端末にデータを送つてくる。

「これは」

「以前、異変の調査に向かつた時の報告書だ」

私はそれを読む。

調査に向かつたのは三人。リーダーに勇士司令部のネオス。以下、グレート、パワード。

異変は現在、この宇宙に不定期かつ不規則に発生するゲート。別の並行宇宙につながつており、ゼロによると別の並行宇宙でもいくつか確認されているらしい。

被害にあつているのは、ヒューマノイド型の宇宙人。そのゲートに吸い込まれ、帰つて来ないという噂だ。

三人はゲートの発生の知らせを受け、調査に向かつた。ゲートまでは、ゼノンも同伴し、連絡が途絶えた際は救出に向かうようにしていたという。

結果として、四人全員が帰つて来なかつた。

そのゲートはいまだ閉じておらず、宇宙警備隊は早急に追加の人員を派遣することにしたという。

「で、私ですか」

「そうだ。場所はデータを送つてある。チームは、お前をリーダーにし、スコット、チャック、ベスの四人だ」

私はメンバーを確認し、ゾフィー隊長に向き直る。

「では、行つて参ります」

「頼んだぞ、セブン21」

ゲートに到着する。

前回同様、同伴者として一人がゲートの外で待機している。今回はマックスがその任に当たつている。

私はマックスに

「では、頼んだぞ」

と伝え、チームの三人を連れてゲートへ入つていった。

ゲートの奥には、並行世界……パラレルワールドが広がつていた。

私は三人に合図を出し、一定の間隔で散らばるよう命じる。奇襲を受けて全滅しないためだ。

周囲に怪しい星や物体などはなく、普通の宇宙空間が広がつている。

しかし、少しすると遠方から何かが近づいてくる。三人に警戒するよう合図し、目を凝らすと、それはウルトラ人のようだつた。銀のボ

ディに紫のライン。光の国では見ない配色だ。

そのウルトラ人は接近し、私たちに話しかけてきた。

「ここにちは、ようこそ！　私たちの世界へ！　さあ、私についてきてください」

「どこへ行くんだ？」

私が問う。すると、彼は名乗りながらその問いに答えた。

「私はウルトラマンセカイ！　案内しますね、私たちの理想郷、ウルトピアへ！」

理想郷 —ウルトピア—

マキ、リーゼ、アンゲルの三人は、今日も宇宙船でエボルトラスターの光が射す方向へと向かっていた。途中、ワームホールを通り別の宇宙への移動を繰り返したが、彼らにとつては日常茶飯事であった。光が射す先に、小さくだが星が見えてきた。

「今回の目的地はあれだな」

マキは気合を入れなおす。今まで数々の世界を旅してきたが、いまだ自分の実力不足を感じている。事実、その戦いは多くを他の戦士に助けられてのものだつた。

記憶がないことを言い訳にはしたくなかった。マキは、たとえ見知らぬ人でも失いたくなかったのだ。魂に刻まれた叫びがそれをずっと訴え続けてきたからだ。

マキが考え込んでいるうちに、宇宙船はその星へと向かっていく。だがその時、宇宙船を衝撃が襲つた。

「何が起きた!? 怪獣か!?

「どうやら沿うみたいだ……マキ、頼む!」

「任せろ」

リーゼにそう返事をし、マキはシートから立ち上がる。行き先を示していたエボルトラスターを手に取り、高く掲げる。それは眩い光を発し、その中から銀色の巨人が姿を現す。

ウルトラマンネクサスと呼ばれし巨人——それは即座に体色を赤に変化させ、衝撃の発生源を探す。

「あれか……」

近くに漂う小惑星。そこに、暴走状態のロボット兵器・キングジョーカスタムを発見した。マルチバース全土で発生しているロボットの暴走は、この宇宙にも発生していたようだ。

宇宙船を簡易エネルギー・バリアで包み、赤き巨人は小惑星に向かって飛ぶ。キングジョーはカスタマイズされた腕のランチャーからエネルギー弾を発射。マキは素早く回避しながら敵に接近。そのまま体当たりを喰らわせた。

しかし、鋼鉄のボディには傷一つつかない。もちろん、この威力での直撃が無効なので、打撃もキックも効果はない。

体勢を立て直し光弾を撃つも、露と消え、逆に額からの光線で反撃される。

「攻撃がどれも全く効かない……なら、これに頼るしか……」

腕を十字に組み、最強の必殺光線、オーバーレイ・シユトロームを放つ！

しかし、キングジョーはその体を瞬時に4つのパーティに分離し、やすやすと光線を避けてしまった。

エネルギーを急激に消費し、膝をつくマキ。

胸のカラータイマーが赤く点滅し、体力の低下を知らせる。

「やつぱり、一人では力不足なのか……！」

その時だった。

遠方から二人の戦士が飛来。小惑星に着地した。

「間に合つたようですね」

銀の体に紫色のラインが入つた男のウルトラ戦士と、「早くかたづけちやおー」

銀の体に黄色のラインが走る女のウルトラ戦士。

二人はマキをかばうように倒れた彼の前に立ち、キングジョーに向かっていった。

誕生 —バース—

「ウルティウムキャッチャー」

黄色のウルトラウーマンは腕から四本の光のロープを射出。回避しようと四つのパーツに分かれたキングジョーを残さず捕らえる。「ウルティウムカッター!!」

次の瞬間、捕らえられた各パーツに向けて紫のカッターが接近し命中！ 紫の戦士の切断技が決まる。

キングジョーの部品そのものは頑強で、カッターの斬撃による手ごたえは無い。しかし、紫の戦士が狙つたのは、パーツ同士をつなぎ合わせる小さなパーツだつた。その部分を丸ごと抉りぬき、キングジョーはバラバラになつて崩壊。ものの数秒でその戦いは決着がついたのであつた。

マキは、よろよろと立ち上がり二人に声をかけた。

「さつきは助かつた。俺はマキ——たぶん、ウルトラマンネクサスだ」

紫の男が返事をする。

「たぶん？ 変わつた人ですね。申し遅れましたが、私はウルトラマングレイという者です」

隣の黄色の女も、

「わたしはウルトラウーマンカイチ。よろしく」と名乗つた。

「グレイにカイチ、よろしくな」

マキは宇宙船の方を見る。二人も無事のようだ。

「あちらにもお仲間が？」

「ああ、でも彼らは巨人にはなれないから、あそこで待機してもらつていたんだ」

それを聞くと、グレイとカイチは驚きと共に言つた。

「それはいけない」

「ようこそ、私たちの理想郷へ」

その後、二人の案内でマキ、リーゼ、アンゲルの三人は彼らの故郷・

ウルトピアに来ていた。そこは、先ほどエボルトラスターが示していた星でもあつた。

「それにしても……すぐいところだな」

そこは巨大な電腦都市であつた。人の気配はあまりなく、ほとんど人は電腦世界で暮らしている。ここは現実世界とコンピュータワールドを自由に行き来できる星だつたのだ。

「みなさん、こちらです」

「この大きな機械はいつたい？」

そして、この星にはもう一つの驚くべき技術があつた。

「あなたたちもマキさんのように戦士となるべきです！　自衛のため

に！」

それは、人々を巨人——ウルトラヒューマノイドにできるというものだ。この技術によりこの星の人々は全員巨人としての姿を持つおり、いざとなれば一般の人々も怪獣の脅威に立ち向かうのだそうだ。

「これを使えば、リーゼさんもアンゲルさんも、巨人になれるんですね」マユイと名乗る青いウルトラウォーマンがこの巨人化機械について説明する。

機械は巨大で、巨人が入れるようそれより一回り大きい棺桶型になつてている。

「この機械に入つていただき、プラズマエネルギーとルパートナーマーが巨人の体を構成します」

「巨人から人型には戻れるの？」

リーゼが疑問を呈す。確かに、この星の人々は全員巨人の状態で生活しており、人間の状態の姿でいる人を見かけない。マユイは笑顔で

答える。

「ええ、もちろん戻れますよ。ですが、この星は巨人の姿の方が快適です。不慮の事故に対応することができるからです。エネルギーは人工プラズマシヤワーから供給されますし」

街中の様子がモニターに映し出される。

人々は食事や睡眠をとる必要はなく、その代わり街中にある噴水の

ようなものからエネルギーを補給している。

もしリーゼやアンゲルが巨人になるなら、人型に戻つて食事などでエネルギー補給する必要がありそうだ。

「いいわ、私はやるよ。巨人になる。その方が強いやつと戦えそうだし」

「僕もなりたいです！　自分の体は自分で守りたいし……」

マユイは笑顔でそれを受け入れる。

「では、こちらへどうぞ。すぐに準備いたしますね」

マキは二人の意見を尊重し、口を出さなかった。

アンゲルとリーゼは機械の中に入つていく。巨人化機械が作動する。

そして――

赤い巨人、ウルトラマンアンゲルと、

青い巨人、ウルトラウーマンリーゼ。

二人の戦士がこの理想郷・ウルトピアで誕生した。

対立 —コンフリクト—

アンゲルとリーゼは巨人となつて機械から出てくる。

アンゲルの巨人体は、スマートな銀色のボディに赤いラインが入つた、マキと同系統の配色。

リーゼの巨人体は女性らしくマキよりやや小柄だが、しつかりとした銀のボディに青のラインが走る。

二人とも、マキやウルトピアの人々と遜色ない巨人として”誕生”した。

「二人とも上手くいったみたいでよかつたよ」

「いやー、まさか自分が巨人になるなんて思いもしませんでしたよ」「これで強いやつを探す旅も楽になるなー！」

「おい、俺の記憶もさがしてくれよ……」

そんなことを話していると、機械を調整していたマユイに通信が入つた。彼女は少し席を外していたが、やがて深刻な表情で戻ってきた。

「実は、皆さんがいらつしやる前にこの星に侵略者が現れ、拘束してい

たのですが……その者たちの同胞が攻めてきたようです」

「し、侵略者!? こんなに巨人が来るのに侵略しようとするなんて、正気じやないな」

リーゼは驚愕するが、マユイは首を振る。

「その侵略者もまた、巨人なのです」

地下の収容所では、プラズマエネルギーを無効化する電磁波を照射し、侵略者の巨人を拘束。さらに、交代で衛兵が立ち、脱出を食い止めている。

その数はわずか四人だが、この星の巨人が千人がかりでようやく抑えることができたとてつもない強敵だったという。

そして、今回も侵略者の数は四人。

「以前の襲撃から間が開いておらず……戦士たちは万全とは言えません。そこで、あなたたち三人にも協力してもらいたいのです」「もちろん、協力する」

「巨人にさせてもらつたことですし」

「よし、巨人の力の試運転といきますか！」

マユイの紹介で、ウルトラマンアイハとウルトラマンアルルという二人の戦士がサポートにつき、三人はウルトピアの中心部に向かつた。

そして、空中エレベーターで近くの小惑星までワープ。そこには、大勢のウルトピアの戦士と、それに取り囲まれる四人の巨人がいた。

「あれが侵略者……」

「ええ、以前も手ひどくやられました……今回は被害が少なく済むとよいのですが」

アルルという青いウルトラマンが答えながら、端末を操作する。エレベーターは集団から少し離れたところに停まり、五人は外にでた。

「すごい！ 宇宙空間でも息ができる」

「感心している場合ではありません、アンゲルさん。来ます！」

アイハがそう言うや否や、高速で飛んでくるナイフのように鋭利な宇宙ブームラン。それが戦士たちを蹴散らしながらこちらへやってくる。

「ウルティウムケイン！」

「ウルティウムスピーカー！」

アルルは魔術師の杖のような武器を、アイハは音を発するスピーカー型の武器をそれぞれカプセルから取り出す。

「行くぞアイハ！ 準備はいいか！」

「いつでもいけますよ！」

アルルが杖から発した空気を切り裂く金属音が、アイハのスピーカーで凝縮されて放たれる。息の合ったコンビネーションはブームランを発射した者のところまで打ち返した。

「個々人の力はそれほどでもない、だが。カプセル怪獣の技術まで持つてているとは……やはり、この星は危険だ」

ブームランを投げ返された巨人が言つた。

その巨人は、赤いボディに銀のラインが入つており、額に輝くエメラルドの如きビームランプが特徴的な戦士だった。

M78星雲光の国の宇宙保安庁から派遣されたエリート戦士、ウルトラセブン21。それが彼の名前だった。

激突　—クラッシュユ—

この星を襲撃した侵略者。それは赤き巨人・ウルトラセブン21であつた。

対峙するのは、マキと、巨人となつたアンゲルとリーゼ、そしてウルトピアのアルルとアイハ。

小惑星上で力と力が激突する——

「ハアッ!!」

マキが力を込め、その体が赤きジユネツスへと変化。瞬時にセブン21に肉薄する。セブン21は頭部の宇宙ブーメラン・ヴエルザードを手に持つて構え、対抗。マキの打撃を受け流す。

「フン!」

霸氣のある掛け声とともに、ヴエルザードを投擲。狙いはマキの後ろの4人だ。アルルが杖で受け止めるが、それは真つ二つにされてしまった。

一方、マキは一瞬の隙をつかれ、蹴りを入れられる。怯んだ体をセブン21はがつしりと捕まえ、怪力で投げ飛ばす『21ホイップバー』で上空へ打ち上げる。

回転し宇宙空間で受け身の取れないマキに、セブン21の追撃『アドリウム光線』が命中。

「このウルトラ戦士……強い！」

反撃しようとスピーカー型の武器を構えたアイハに、セブン21は磁力光線である『21・アタック・ビーム』を撃つ。すると、アイハの持つ武器は内部から火花を起こし故障。

「まずい！　どうしましようアルルさん!?」

「待つて……今考えてる」

しかし、敵は待つてはくれない。セブン21はヴエルザードを頭部に戻し、彼らに近づいてくる。

すると、リーゼが動いた。

「巨人になつたつてことは、鍛えた私の体も強くなつたつてことだよね」

腕を回し、セブン21とにらみ合う。

「さあ来い、私が相手だ!!」

武術の構えを取るリーゼ。応じるセブン21が接近し、肩に強烈な手刀を喰らわせようとする。リーゼはそれを受け流し、ダメージを最小限に抑える。その一方で、アンゲルに合図を送る。

アンゲルは今まで戦いに参加せずにいた。それはリーゼのように体力を温存するためではない。

自分のエネルギーをボールとして具現化していたのだ。彼の手には巨大なエネルギー弾が生成されていた。

合図を確認し、彼はそれをリーゼに投げつける。

「いっけえええ!!!」

リーゼはそれをがつしどつかみ、そのままセブン21の体に叩き込む！

「悔ったな、これでも喰らえ！」

衝撃が連続してセブン21の体を叩く。

「どうだ、私たちの連係プレー！」

先ほどからの連戦のうえ、五人がかりで応戦され、膝をつくセブン21。遠方に飛ばされていたマキが戻つてくるのを捉え、立ち上がる。

「あれを喰らわせてまだ立ち上がるのか……!? マキ！ 危ない！」

セブン21は残るエネルギーを結集させ、腕をL時に組むと破壊光線『レジアショット』を放つた。

それが、マキに向けて一直線に飛んでいく。

先ほど猛攻を受け、傷が癒えていないマキはそれをかわす力が残つてしない。

「このままじゃ……！」

その時、上空から飛行ユニットで接近してくるものが居た。

それは、先ほどリーゼとアンゲルの巨人化をサポートしたマユイだつた。彼女はマキの前に着地すると、端末を操作し始めた。

「マユイさん、危ない！」

マキが叫ぶと同時に、彼女は前方に電磁シールドを展開。レジアショットにぶつけて分散させた。

「私の能力はウルティウムハック。この小惑星の緊急防衛装置をハッキングし、操作させてもらいました」

マユイと彼女に救われたマキが4人のもとに戻ると、アルルとアイハがセブン21を捕縛していたところだつた。

「それでもすごい強敵でしたね、アルルさん」

「そうだねアイハ。こつちの武器も壊されちゃつたし」

「我々の仲間六百人ほどの活躍により、残る三人も捕らえられたようですよ」

マユイが戦況を報告する。

「無事終わつたみたいですね、よかつた……」

「そうだな」

アンゲルの安堵の声に、知らない人物の声が答えた。

「あなたは……」

そこにいたのは、全身が紫色の巨人だつた。

「おつと、自己紹介が遅れました。私は、ウルトラマンセカイ。この世界の創造者にして、最高権力者です」

世界 —ワールド—

「おつと、自己紹介が遅れました。私は、ウルトラマンセカイ。この世界の創造者にして、最高権力者です」

そう名乗った紫色の巨人は、捕らえられたセブン21と仲間の三人を念動力で引き寄せた。

ウルトピアの戦士の一人であるアイハがそれを止めようとする。「何を言っているのです！ 誰ですかあなたは!?」

「この星の権力者は国王ウルトラマンムーン、女王ウルトラウーマンメープル。王女兼軍隊長ウルトラウーマンソード。セカイなんて名前、聞いたことない」

アルルも困惑した様子だ。

それをあざ笑うかのようにセカイは言い放つ。

「そりやそうだ。お前たちも私が作つたんだからな」

突如セカイの腕から震動波が放たれ、アルル、アイハ、マユイを包む。

「な、何だこれ!？」

「ぐうつ……苦しい、息が……」

悶絶しだす三人。

「大丈夫か！ おい、三人に何をした！」

叫ぶマキをにらみつけてセカイはつぶやく。

「元の姿に戻してやつたのさ、宇宙空間で息ができるかは知らないがね」

三人は衝撃波によつて体を溶かされ、アメーバ状になつた後、消滅した。三人だけではない。何百といたウルトピアの戦士たちは全員消えていた。

「アメーバ型生命体を機械によつてウルトラヒューマノイド化。偽の記憶も与えれば、私だけの軍隊の完成さ。いらなくなつたら消せばいい……もつとも、それも不要になつたがね」

いつの間にか、ウルトピアで捕らえられていた四人のウルトラ戦士も引き寄せられていた。そして、そのエネルギーをセカイは吸収し始

める。

「全ては、光の国のウルトラ戦士の純度の高いエネルギーを手にし……私が究極の存在となるための礎だつたのだア!!」

マキ、アンゲル、リーゼの三人はただ見ることしかできない。

七人のウルトラ戦士の力を吸収したウルトラマンセカイ。その姿が徐々に変質していく。腕には爪。背には翼。そして頭には悪魔のような角。

それはもはや巨人ではなく、紫の魔人であった。

「この世界だけでなく、全ての宇宙を我が物にする……手始めに貴様らから始末してくれる!!」

そう言うとセカイは先ほどの衝撃波をアンゲルとリーゼに向けて放つ。

「貴様ら宇宙人にもあの機械が適能したのは誤算だつたが……ここで消せば同じこと!」

「まずい! 一人ともよけろ!」

マキが叫ぶ。先ほどの様子を見るに、二人が宇宙空間で元の宇宙人体に戻つてしまい、息ができない可能性がある。それは避けなければ死につながる。

「でも、あんな大きな衝撃波……」

「だめだ、間に合わない! ……マキさん!」

一人の前に立ち、かばうように立つマキ。

「うおおおつ!!」

せめて相打ちにと、渾身の光を放つマキ。それは意図せず三人を包むように放射状に広がる。

「な、何だこれは!?」

「マキさん!?」

「いや……俺にもわからない……だが、これは」

三人を包んだ光はドームを作り、そしてその場所から三人とともに跡形もなく消滅した。

セカイが周囲を見渡すが、三人を見つけられない。

「チツ……逃したか」

放つても問題ないと判断し、次に彼はウルトピアに狙いを定める。

「……」

三人は謎の空間で目覚めた。岩肌が激しく隆起し、発光する鉱石が見えている。空は赤黒く、オーロラらしきものも見える。

そこは、ウルトラマンネクサスが戦闘用に作り出す空間・メタフィールドであつた。

周囲と隔離された異空間を生み出したことで、魔人セカイの衝撃波からアンゲルとリーゼを守ることができた。

「なんとかなつたようだ、助かつた」

息をつくマキ。すると、その空間が上部から消滅し始める。

光の粒子となつてメタフィールドが消え、元の空間に戻つていた。そこには、先ほどの小惑星。そして、倒れた7人のウルトラ戦士たち。

しかし、一つだけ変わつていたことがあつた。

ウルトピアが、跡形もなく消滅していたのだ。セブン21が顔をあげ、言う。

「あの星なら、さつき……奴が破壊していった」

魔人セカイは、不要になつたウルトピアを衝撃波によつて木つ端微塵にし、去つていつたというのだ。

「くそつ……この星を、誰一人守れなかつた……」

宇宙空間に、彼の空しい叫びがこだました。

惑星ダンパレダ編

故郷 —ホームタウン—

マキは自分の力で二人の仲間を守つた。しかし、失つたものも多かつた——

「ウルトピアが……消えた」

「まずい、私の宇宙船も壊されたみたいだ」

「僕たち、ここからどうやつて移動すれば……」

三人が立ち往生していると、どこからともなく宇宙船型の石像が飛来。マキたち三人の巨人の前で停止した。

「マキ、これは……？」

リーゼの問いに、マキは首を振る。謎の石像は人間ほどの大きさで、巨人になつた三人にはとても小さく見える。それが、ぼんやり青く光り始めた。

「な、何だ!？」

困惑する三人を石像の発する光が包む。次の瞬間、目を開けると不思議な空間にマキたちはいた。

三人ともいつのまにか巨人でなく元の姿に戻つている。

「ここはいつたい……」

「見てください二人とも！ 外の様子が見えます」

天使の指さす方を見る。小惑星の岩肌や、倒れたウルトラ戦士とセブン21が見える。

「これはさつきの石像の中だ！ これは宇宙船……なのか？」

石像に収納された三人。周りは光で包まれ、不思議な感じだ。その光のなかでマキたちは漂つている。

すると、石像の外側から、大きな顔が見えた。

「失礼。私はウルトラマンマックス……そこの7人の仲間だ」

マックスと名乗った赤い巨人が石像の中のマキたちに話しかけてきている。

「セブン21から話は聞いている。先ほどは大変すまなかつた。我々

はあの星を敵と見定めていたが、どうやら間違いだったようだ

セブン21たちは、ウルトピアを危険な星であるとして排除しようとした。しかし、それはすべて黒幕・ウルトラマンセカイの謀略だったのだ。先ほどはウルトピアの仲間としてマキたち三人も攻撃されたが、今や戦う理由はない。

「これから私は、7人を連れて帰る。だが、ウルトラマンセカイが現れ際には、必ず力になろう」

そして、マックスやセブン21とともに、ウルトラ戦士たちは飛び立つた。故郷に傷を癒しに行くのだろう。

マキも出発しようとし、しかしこの宇宙船型石像の操縦の仕方がわからないことに気づく。

「レバーかなにか見当たらぬいか？」

そう言っていると、エボルトラスターは光を発し、次の目的地を指す。それに反応するかのように、石像は光に沿って動き出す。

「何だ!? 勝手に動き出したぞ！」

「これは……よくわからないけどありがたいね」

困惑するマキと仲間の二人を連れ、石像は次の星へ猛スピードで進んでいく。

——惑星ダンパレダ——

石像に乗つて、三人はある星にやつてきた。その星は、ウルトピアと同様かそれ以上に科学の発達した街並みが見える。

石像は小高い丘に着陸。光は、丘からちょうど見下ろせる小さな町に向かっていた。

三人は小さな町に向かって歩いていく。自然もそれなりにあり、小さな町も、科学技術の発展した大都市もある。そんな平凡な星のように見える。

その町はしかし、様子がおかしかった。

町の人々には生気がない。皆何かに怯えている、そんな様子だつた。

あまりに痛々しくて事情を聴くのもはばかられる。
「いつたい、この星に何が……」

円環　—オーブ—

この星の人々は生氣がなく何かに怯えている——

その原因を探ろうとしたマキたち。だが、周囲にそれらしき異変は見つからない。

「ちよつと邪魔！　みんなどいて」

すると、霸氣のない人々を押しのけ、一人の青年が現れた。

青年は小さなバイクに乗つてマキたちの近くまでやつてきた。青年は髪の色素が薄く、マフラーを首に巻き、白衣を纏つっている。

「ども。あんたたち、ここの人じやないでしょ。なんでこの星に？」

青年は警戒しながら訪ねる。もちろん、他の人々はマキたちに目もくれない。話しかけてきたのはこの青年だけだ。

「この光の射す先で、いつも事件が起ころる。だから、それを解決しないた」

マキがいうと、青年は諦めたように言つた。

「無理だよ。あれは解決できる代物じやない」

青年はシーカと名乗つた。彼は、この星で有数の優れた頭脳を持つ者だつた。

数年前、彼がまだ若いころ、星の外から来客がやつてきた。それが悲劇の始まりだつた……

やつてきたのは「星間連盟」。この宇宙の平和を守るため、様々な活動をしているらしい。そんな彼らがこの星に依頼をしてきた。

その内容は、『光』の研究。

その光は、選ばれたものに巨人となる力を与えるというもので、星間連盟はその組成については解明済みだつた。しかし、科学的に実験を行つても、人を巨人に変えることはできなかつたそうだ。巨人化の謎について説くのが、この星に求められたミッションだつた。

「今思えば、その星間連盟つてやつも怪しかつたな。でも、本題はそこじやあない」

莫大な研究費を受け取つたこの星は、主任研究員にシーカを指名。

三年にわたり研究が続けられたが、成果は出ず、星間連盟の担当者は研究費の提供を打ち切り帰つていった。

「研究は事実上凍結した。でも、その後で事故が起こつたんだ」

放置されていた“光”の複製サンプルは、地震をきっかけにして空気中に飛散。シーカは慌てて回収したが、その時この星の大気が混ざり、その組成が変化した。

「これは、偶然にも人の体積や細胞を変化させる作用を持つていた。つまり、この不慮の事故によつて実験は成功したんだ」

星間連盟との連絡手段は残つておらず、シーカはこのことをとりあえずこの星の上層部に伝えた。

この星は戦争をしたことのない温厚な氣風だつたため、最終的に破棄されることになった。

「もつとも、研究者として興味深いものだつたから、僕は自分用に少し隠し持つっていたんだけどね」

そして、破棄が行われる日。厳重にロックされた金庫からその“光”を入れた容器を取り出した、その瞬間——それは盗まれた。盗んだのは、彼と共に研究を行つていた研究者・セカイだつた。

「セカイ……まさか、ウルトラマンセカイ!」

驚きの声を上げるアンゲルに、シーカはうなずく。

「知つてたようだな、まあそれも当然か」

シーカはセカイが行つてきた悪行について語つた。

「彼はその“光”を複製し、自分を巨人化。それだけに飽き足らず、動物や細菌、植物まで巨人化させた。数にモノを言わせ、この星の侵略に乗り出した……」

「それで、どうなつたんですか?」

マキが遠慮がちに聞く。

「そうだね……まず、僕が巨人になつた」

彼はポケットから小ぶりのチャクラム（円盤型の武器）を取り出した。それは不思議な文様が彫り込まれており、不思議なパワーを感じる。

「これは僕が“光”を手にしたときに気づいたら持つっていたものだ。

これを使つて巨人に変身する」

巨人となつたシーカは、セカイの悪行を止めるため戦つた。しかし、シーカは複製が作れなかつたため一人だけなのに對し、セカイは複製を繰り返し、力は弱いが大量に巨人を生み出した。

「さすがに数が多すぎた。僕一人じや倒せなかつた。だけど、そんなときには彼がやつてきたんだ」

「彼？ それは、いつたい……」

「彼は、僕に味方してくれた正義の巨人さ。名前は、クレナイ ガイ。またの名を、ウルトラマンオーブ」

集結　—ギヤザー—

アメーバ型生命体から作り出した巨人の軍勢を従え、セカイは惑星ダンパレダの制圧に乗り出した。

たつた一人で抗戦するも、苦境に立たされるシーカ。そんな彼を助けたのは、宇宙を旅する風来坊・クレナイ ガイであつた。

彼は光を纏い、偽りの巨人を蹴散らしながら着地。胸にはセカイやシーカの巨大人体と似た、光る円環が刻まれている。

「オーブカリバー！」

彼の手に光り輝く聖剣が出現。それをふるうと、周囲の偽の巨人たちは次々に両断され、消滅。セカイのみが残された。

セカイは闇のエネルギーによる光弾を放ち、オーブを牽制。しかしオーブは、それを剣で撃ち返す。

跳ね返ってきた自分の光弾でひるまされたセカイ。そこに、どどめの一発が撃ち込まれる。

「オーブスプリームカリバー！」

一閃。

激しい光の奔流が音を上回る速さで空中を走り、セカイの体を貫く。

激しい衝撃の後、爆発が巻き起こる。その後には塵さえ残らない。

こうして、ウルトラマンオーブに救われるかたちで惑星ダンパレダは平和を取り戻した――

――はず、だつた……

セブン21、ネオス、グレート、パワード、ゼノン、スコット、チャック、ウーマンベス。

八人の光の国のウルトラ戦士、その力を吸収し、魔人となつてセカイは帰ってきたのだ。

「僕たちは奴を仕留め切れていたんだ。そして今、奴は僕たちを弄んでいる」

どこからか調達した巨大ロボットを使い、セカイはこの星の住人た

ちをじわじわと消耗させている——それをシーカは一人で食い止めているのだつた。

話している間にも、空から飛翔体が現れる。

「そら、また来たぞ！ あれが奴の兵器、インペライザーだ！」

鋼鉄の兵器が一体、また一体と地上に降り注ぐ。

インペライザーと呼ばれたロボットは、市街地に向け進行。

「行くぞ三人とも！ とりあえずあいつらを止める！」

アンゲルとリーゼはウルトピアでもらつた変身用の指輪を、マキはエボルトラスターを、そしてシーカは不思議な光を放つチャクラムを手にする。

四人は眩い光に包まれ、そして巨人へと変身する！

胸に青いカラータイマーと赤きエナジーコアを持つ、赤銀の戦士・ウルトラマンネクサス ジュネッス。

桃色のボディに銀のラインと胸の円状の光が輝く——ウルトラマンシーカ。

ウルトピアで生まれた、新しき赤と青の戦士。ウルトラマンアンギルとウルトラウーマンリーゼ。四人の戦士は市街地を背後に出現し、インペライザーに向かっていく！

アンゲルはバリアを開き、インペライザーの砲撃から街を防御。その隙に上空からリーゼの光のカッターとマキの光線が炸裂！

衝撃を受け、後ずさつたロボット兵達。そこに、シーカの巨大チャクラムによる重い一撃が加えられる。ロボット兵インペライザーは真っ二つに割かれて撃沈。

「なんとかなつたか……」

一息ついたマキが呟く。

「いや、まだだ。奴はこちらの戦力が増えたことを知つて、さらに兵を送り込んでくるぞ」

シーカの言うとおり、新たにインペライザーが投下される。身構える四人。しかし、ロボット兵達は着地することなく光の束によつて消し飛んだ。

マキたちは思わず光の放たれた元を振り返った。

「あれは……！」

そこには、九人のウルトラ戦士の姿が。セカイに力を奪われ倒れたはずの八人と、彼らを連れ帰ったウルトラマンマックスがそこにいた。

「待たせたな、異邦のウルトラ戦士たち！」

セブン21がそう声をかける。

彼らはマックスの持つて来たマックスギャラクシーのエネルギーによつてすぐさま回復し、セカイの進路を追つてきていたのだつた。「これで、魔人となつたセカイにも対抗できるかも知れない……！」

シーカが感激で声を震わせる。

インペライザーを破壊され、劣勢となつたセカイは魔人の姿をついに現した。

その姿は禍々しく、すでに巨人——ウルトラマンの面影はない。「私の世界に必要のない蠅の存在は……ここで潰す」

肥大化した手のひらから暗黒のレーザーを放つ魔人セカイ。集結した十二人の巨人たちは一斉に散らばり、空中へ退避する。

そこからは、連携しつつ常に数人で周囲を取り囲み、レーザーを避けながら視線を誘導。隙をつくり、そこをついて攻撃。死角からの衝撃にセカイは徐々にバランスを崩していく。

「私の神にも勝る力で……葬る」

魔人セカイの身体がさらに巨大化。その大きさは120mを超えようとしている。

体色は青黒く変色し、巨人たちを見下ろした後、漆黒の翼を以て吹き飛ばした。

「ぐおおつ！」

「なんて凄まじい風圧だつ！」

辛うじて体勢を立て直したセブン21がヴエルザードを放つ。ヒュンと風切り音とともに飛ぶそれは、しかし黒色の体にはじき返される。

それぞれが死角をついて攻撃を与えるが、強化された外被膜はことごとくを打ち消す。

打開策を探すシーカに、マキが合図を出す。

（俺の合図でチャクラムを飛ばせ！）

（ああ、わかつた。やつてみよう）

マキは近くにいたグレートとパワードにも合図を出す。

（協力してください！）

二人のウルトラ戦士はうなずき、グレートは腕にプラズマ波を発生させる。

パワードは瞬時に強力破壊光線・メガスペシウム光線を発射！光線はセカイの注意を引く。

その隙に、シーカのチャクラムにグレートのバーニング・プラズマが放たれ、チャクラムがプラズマ波を帯びる。

「これなら……」

ネクサスのオーバーレイ・シユトロームが炸裂！ メガスペシウム光線に交じって、セカイの鋼鉄の皮膚を圧倒的熱量で溶かす。しかし、それも必殺には至らない。

光線を妨害しようと振り上げられる魔人の腕。それを、セブン21のレジアショットとネオスのネオマグニウム光線が食い止める。

翼から発生させる風圧で吹き飛ばさんとするが、それはウルトラフォースの三人・スコット、チャック、ウーマンベスのグラニウム光線によつて防がれる。

そして、オーバーレイ・シユトロームによつて溶かされた皮膚の部分に向け、アンゲルとリーゼが光線を放ち、肉体内部をこじ開ける。すかさず、その場所向けてシーカの帶プラズマ・チャ克拉ムが投げつけられる！

全員の協力によつて決まつたその攻撃は、内部でのプラズマの炸裂により魔人を内から溶かしていった。

「グおおおおおお！」

何かを言うことさえ許されず、聴き取れぬ断末魔だけを残して魔人セカイは消滅した。

奇襲 —サプライズ—

正義の使者たる光の国の戦士たちは、この世界を去つていった。マキたち三人がそれを見送つてはいるが、背後の街から歓声が上がつた。ダンパレダ星の人々だ。その目には光が戻つてゐる。

「ありがとう……君たちのおかげだ、これでこの星も活気を取り戻す」シーカが礼を言い、人間大に戻る。それに続いて元の姿に戻つたマキたち三人。マキが手元を見ると、エボルトラスターは新たな行き先を示している。

「もう行くのかい」

「ああ……この光の先に、また新たな事件がある……」

ふと光を見ると、それは上空に伸びていた。その光の先には、空に浮かぶ不気味なピエロの男がいた。

「……何だ、あれは」

マキがそう漏らし、シーカとアングエルも見る。

「！」

ピエロの男の手には、いつの間にカリーゼが抱えられていた。

「誰だ！ リーゼを離せ！」

マキが叫ぶ。

リーゼは眠つてゐる。先ほどまで共に戦い、ついさつき人間大に戻つたばかりである。つまり、この一瞬のうちにピエロ男は彼女を眠らせ捕らえたのだ。

ピエロはマキたちを見下ろすと、ニヤリと笑つた後リーゼとともに消滅。

次の瞬間、巨大な物体に光がさえぎられる。

それは、まぎれもないロボット怪獣だつた。

四次元ロボ獣・メカギラス！

上空から落下する巨大な機械の獣。

エボルトラスターをすぐさま抜き、変身したマキが迎え撃つ。

銀と銀のボディがぶつかり合い、激しい火花を散らす。

メカギラスは破壊光線とミサイルで特攻を仕掛けてくる。街への

被害を防ぐために防戦一方になるマキ。

「ここは僕に任せて、二人はあのピエロを追え！」

アンゲルとマキにそう言い、シーカは変身用チャクラムを構える。

「恩に着る……！ 行くぞアンゲル」

マキが変身を解除するのと入れ替わりで、桃色の巨人・ウルトラマンシーカが顕現する。

マキのもとに、宇宙船型の石像が飛来してくる。アンゲルとマキを格納し、石像は発進。惑星ダンパレダを後にした。

シーカはメカギラスと対峙する。街を背後に守りながら、彼はロボットの弱点を探す。

シーカが牽制として光線を放つ。すると、いともたやすく敵のボディに傷が入った。

メカギラスは防御機能を有しておらず、その代わりに攻撃機能を特化させた機体に改造されているようだつた。
シーカはチャクラムでミサイルをはじき返した後、必殺光線をチャクラムのエネルギー増幅機能で強化し発射。

無事、メカギラスを擊破した。どうやら、時間稼ぎのためだけに投下されたようだつた。

「マキ、アンゲル、そしてリーゼ……無事を祈る」

——惑星ダンパレダ付近の小惑星——

セカイは、魔人体を捨てて命からがら逃げだした。プラズマによつて魔人の体と力は失われ、今は巨人の体を保つので精一杯だ。だが。

「私は、生き延びた……もう一度ウルトピアを再演し、再び神に勝る力を手に入れる……！」

その野望は潰えていなかつたようだ。

そんな彼の視界に、遠方よりやつてくる人影が見えた。

「誰だ、あれは……メフィラスとチエーンは死んだとの報告を聞いた

……チヤリジヤか？ いや、あいつはピエロの姿のはず……」

それが近づいてくるにつれ、セカイの顔は驚愕と焦りに包まる。

「ま、まさか……そんな馬鹿な」

「貴様か。ウルトピアを破壊した、我が主君の仇」

太刀を構え彼の元へと歩を進める、その名はウルトラマンサイレント。

ウルトピア崩壊から逃れた唯一の戦士であった。

「我が名はサイレント。本来は我が主君ムーン王とメイプル女王をお守りすることが使命……」

サイレントは、セカイを前にして刀を振りかぶりながら語る。

「しかしそれは叶わなかつた……これは我の不徳の致す所、よつてここで自害致す」

セカイは必死でこの場をしのぐ方法を考える。しかし、先ほどの戦いによつて彼に力はほとんど残されていない。

サイレントはセカイをにらみつけて言い放つ。

「貴様を打ち取つた後でな」

刃はオーラを纏い、淡い光を発しながら向かつてくる。それをセカイは、必死に躱す。しかし、

「遅いッ」

二撃目は容赦なく、セカイを斬つた。セカイの体は塵となつて消滅していく。

亡靈のごとく、セカイの断末魔が塵に乗つて響く。それを太刀の一閃で振り払い、サイレントは自身の腹にその刃を突き立てた。

ウルトラマンの星編

眠れる神

M78星雲 光の国

ウルトピアとウルトラマンセカイに関する事件を解決し、光の国に八人の戦士が帰還。宇宙警備隊隊長であるゾフィーが出迎えた。

「無事に帰還したな、ご苦労だつた。ネオスたち四人は休息を取つてくれ。ウルトラフォースの三人とセブン21、マックスは私についてきてもらおう」

ゾフィーに従い、五人が後ろを歩く。その先には、宇宙警備隊の本部がある。

本部に入ると、五人は重苦しい雰囲気に包まれた。

ブラザーズマンントを纏つたウルトラ六兄弟の面々、ルーキーのメビウス、ウルトラの父と母など、そうそうたるメンバーがそろつている。そして、彼らに囮まれるようにして円卓型のモニターが置かれている。

五人はゾフィーに促されてモニターの画面をのぞき込む。

そこには、キング星の様子が映し出されていた。そこに、いつもの壮健な巨人の姿はない。先日から、ウルトラマンキングは外部から何者かの攻撃を受け、休眠状態に入っているのだ。レオとアストラがその警護をしている様子も見える。

ゾフィーが話す。

「急で悪いが君たちにも、キング星の警備にあたつてもらう」「わかりました」

セブン21が間髪入れず答える。

光の国のウルトラマンたちにとつて神の如き存在であるウルトラマンキング、その休眠……これは、この世界、いやすべての並行宇宙における危機であった。

その危機に対処するため、宇宙警備隊には今、最高の戦力が集まりつつあつた。

一方、別の宇宙――

マキは、目覚めた時から自身の記憶を失っている。だから、アンゲルとリーゼ……仲間たちとの接し方も分からなかつた。事実、彼らの間には会話は少なかつた。しかし、名前も知らず、世界も違う人々を守ってきたマキにとつて、仲間たちを攫つた相手は許せない存在であつた。

そして、仲間たちは何よりも救うべき存在であつた。

マキとエンジェルを乗せた石像は宇宙を超え、青い星、地球に降りていく。ピエロの男はこの星を決戦の舞台に選んだようだ。別の思惑もあるのかもしれないが……

地に降り立ち、マキはすぐにエボルトラスターを確認。すると、視界の向こうにピエロの男が立つていて。しかし、リーゼの姿はない。「リーゼはどうだ！」

叫ぶマキ。ピエロの男がマキの後ろを指さす。

振り向くマキは見た。エンジェルを捕らえるリーゼの姿を！
「何してる、離せ！」

マキが言うがその言葉はリーゼには届かない。リーゼは抵抗するエンジェルに指を突き立て、闇のエネルギーを注入。

リーゼは既にピエロ男の配下に置かれてしまつて、いるようだつた。そしてエンジェルも……

リーゼは闇に包まれ、その姿が闇の巨人・ダークファウストに変貌！

エンジェルも同様に闇に覆われ、ダークメフィストに！

マキはそれを見て、確信する。以前出会つた紛い物と比べものにならない闇の氣……彼らは、本物の魔人だと。

「うおおっ！」

エボルトラスターを抜き、マキは光と共に変身！

銀色の戦士が姿を現す。

そして、その光がピエロ男の正体を看破。ピエロ男は、怪獣バイヤー・チャリジヤとしての正体を現した。

「やや！ 何だこれは！ 私の姿が！」

慌てるチャリジヤを放置し、マキは二人の前に立つ。

しかし、二人は闇の巨人へと変貌してしまった。それを前にし、マキは元に戻す方法を見いだせないでいた……

怪獣総進撃

アンゲルとリーゼ、二人の仲間の変貌。それを前に、マキはただ止めることしかできないでいた。一体の闇の巨人はマキに光弾を容赦なく放つてくる。

(やめろ、やめてくれ!)

マキの心の叫び……テレパシーによる精神感応も通じない。

ダークメファイストはその腕にメファイストクローラーを構え、ネクサスのボディを削り取ろうと猛攻を仕掛けってきた。

(くッ……)

仲間である二人を傷付けることを恐れ、マキは反撃できない。そうしているうちに、ファウストの光線がマキの胸のカラータイマーを貫かんと突き進んでくる――

その刹那、光線は別の場所から放たれた火球により食い止められた。

(誰だ!?)

そこにいたのは、怪獣であつた。この星に生息していたのだろうか。赤茶色の固い皮膚を持つた四足歩行の怪獣。その腹部が赤く発光し、マグマ弾を発射。ファウストはそれをとつさに回避。しかし、後ろから突撃をくらう。

ファウストの背後には、またしても別の怪獣!

黒光りする全身と丸い頭部が特徴の怪獣が、突進し渾身の頭突きを繰り出したのだ。マキがあつけにとられているうちに、地面から、森から、山から、次々と怪獣が現れ、闇の巨人に向かっていく。

「ここは、怪獣の星か!」

チャリジヤが喜びとも怒りともつかない口調でそう言う。

闇の巨人に攻撃姿勢を見せ、この星を守らんとする怪獣たち。マキは、すぐさまメファイストとファウストをかばう。

(この一人は仲間なんだ! 攻撃するのは待つてくれ!)

怪獣たちはマキを無視して攻撃しようとしてくる。マキはジユネツスの姿へ変わり、メファイストとファウスト、そして怪獣たちの両

側を警戒。

(この状況……いつたいどうすれば)

そこに、青い光が射す。

(……何だ、この光は?)

すると、大きな土煙を上げながら、青い巨人が着地。大地にその姿を現した。

(この世界のウルトラマンか!)

青いウルトラマンは腕から光り輝く剣を出現させ、マキに向かつて構える。

(待て、俺は敵じゃない!)

問答無用で切りかかる青き巨人。その間に、怪獣たちはメフィストとファウストを足止め。

剣によるリーチで優位を取られ、手も足もでないマキ。あつという間に体力を消耗させられ、倒れこむ。そんなマキをどいてろとばかりに蹴飛ばし、巨人はその剣をメフィストにむけて構えた。

ドスン と音がした。その一瞬でメフィストの胸のカラータイマーらしき部分はえぐり取られた。

(やめろおおおッ!!)

頭が真っ白になり向かつていくマキ。青い巨人は、えぐり取つたその部分を剣先で投げてよこした。

それを反射的にキャッチするマキ。

(これは……アングエル!)

カラータイマー部分には、アングエルの体がとらわれていた。それをこの青い巨人が救出したのだつた。

青い巨人はファウストのものも同様に切り取つて渡す。

(すまない、あなたのことを誤解していた、そして怪獣たちのこと) マキは青い巨人と握手を交わす。この熟練した業をもつ巨人と、そしてこの自然あふれる美しい星を守る怪獣たちに最大限の敬意を表して。

そして、カラータイマーを抜き取られた闇の巨人に向き直る。

(行くぞッ!!)

仲間を危機にさらされたことによるマキの静かな怒りが爆発して
いた。

宇宙の異変と渡り鳥

アグルの手により救出されたリーゼとアンゲル。気絶したままの二人を安全な場所に横たえ、マキは闇の巨人と対峙する。

腕を振り払い、赤きジユネツスに変化したマキ＝ネクサスは、青き巨人と共に敵に向かつて駆ける。

青き巨人アグルはその腕に光の剣アグルセイバーを構え、ダークメフィストのクローや弾く。

マキは高速でダークファウストに肉薄。コアを失った闇の巨人をつかみ、回転投げで地面に叩き付ける。

弱つて防戦一方のダークファウストとダークメフィストを、チャリジヤはもどかしげに見ていく。

「ええい、役立たずめ……作戦を立て直さねば！ それに、まだ行かねばならぬ世界もあるし……」

ぶつぶつと愚痴をこぼしながら、異次元のゲートを通り消えるチャリジヤ。

その向こうでは、闇の巨人が追い込まれていた。

ネクサスの必殺光線、オーバーレイ・シユトロームとアグルのアグルストリームが放たれる。その圧倒的な熱量によつて、二体は爆散。それを見て地球の怪獣たちも元の住処に帰つていく。

ウルトラマンアグルに別れを告げ、マキはアンゲルとリーゼの元へ急ぐ。すると、そこにいたのは飛行船型の石像だつた。二人を既に収納し、治療を行つて いるようだつた。

マキもその石像に入り、そしてエボルトラスターを見る。それは再び、新たな行き先を光で示していた。石像がそれに従い、発進する。あつという間に見えなくなる地球。それを見ながらマキは、この光が自分をどこへ導こうとしているのか考えていた。

宇宙のあちこちで暴走する機械たち。その原因を突き止めるために宇宙を飛び回っていた旅人が居た。

宇宙の渡り鳥、クレナイ ガイ。またの名を、ウルトラマンオーブ。彼は別の宇宙へ渡る力を行使し、ロボット怪獣たちを殲滅しながら敵の痕跡を追つた。

そして、ある事実を発見した。

数多ある並行世界。その多くに、闇の呪いとも呼べる概念的な何かが打ち付けられていたのだ。これによつて、その世界と別の世界のバランスが崩れかけていた。しかし、ほとんどの世界で謎の光のエネルギーが相殺しており、最悪の事態は未然に防がれていた。

呪いの術式は、ネオフロンティアスペース、コンピュータワールド、Xの世界ではチエーン星人のものが。

アナザースペース、フューチャーアース、ロツソとブルの世界、ビクトリーの世界ではメフィラス星人のもの。

O—50の世界ではダンパレダ星人。

コスマースペース、リブットの世界、サイドスペース、ガイアとアグルの世界では宇宙バイヤーとして名高いチャリジヤのものだと確認できた。

宇宙全体に広がつてゐる混乱は、彼らによる極めて用意周到な犯行であると推測できる。

しかし同時に、それを防いでいる強力な光の力の持ち主の存在も浮かび上がってきた。

ガイは、ひとまず疑問を捨て置き、チャリジヤの痕跡を追つて別の世界へと飛んだ。そこは奇しくも、彼が初めてのミッションに赴いた世界であつた。

オリジンサーヴの世界編

彼の名はオーブ

ガイはチャリジヤが向かつたと思われる宇宙にたどり着いた。しかし、追跡を察知されていたようだ。

宇宙を漂う小さな小惑星。

そこにチャリジヤ本人が待ち構えていた。

「ウルトラマンオーブか……厄介だな」

そう愚痴をこぼし、チャリジヤは異次元の通路を開く。すると、暴走したロボット怪獣たちが次々と出現する！

「おいおい、ロボット暴走の犯人はあんたか、宇宙バイヤー・チャリジヤ！」

ガイがオーブカリバーを構えて怪獣たちに向かっていく。
その大剣でメカニズム怪獣リッガーの首を一刀のもとに切り落とす。

瞬時にサンダーブレスターの形態へ変身しロボット怪獣ガメロットの突撃を剛力で受け止める。光と闇のエネルギーで包まれた拳の一撃で頭部を破壊。

巻き付いてこよぎとした宇宙竜ナースは、ハリケーンスラッシュのオーブスラッガーランスで切断。

ロボネズの火炎放射をバーンマイトの炎で相殺。負けじと撃つてきた雷撃を、今度はライトニングアタッカーの電撃で打ち消す。そして、スペシウムゼペリオンの形態に変身し、とどめのスペリオン光線を放つて撃破した。

「おのれ、ウルトラマンオーブ！」

召喚した暴走ロボット怪獣をことごとく破壊され、怒りをあらわにするチャリジヤ。

その手には、ガイが別の世界で見てきた呪いの紋章があつた。

「やっぱりこいつだつたか……他の宇宙に呪いを仕込みまくつて、一体何が目的だ」

その問いには答えず、チャリジヤ呪いを植え付け再び逃亡。置き土産に現れたのは、大量のメカゴモラだった。

「やれやれ、こいつを全部片付けるのは苦労しそうだ」

30体はいるそのメカゴモラたちを見てガイが独りごちたその時、別の宇宙からゲートが開き、中から石像が飛んできた。

「何だ、ありやあ」

驚くガイを追い越し、その石像はチャリジヤの放った呪いを相殺する光を放ちながら降り立つ。

「そうか、この石像が今までの世界でも呪いを防いでいたのか……しかし、あれは何なんだ？」

疑問が止まらない彼の視界には、しかしメカゴモラが迫る。

エメリウムスラッガーへと変身し、必殺光線のワイドスラッガーショットで蹴散らしていく。

すると、思いがけない援護が入った。

石像の中から、巨人が出現したのだ。

銀色の巨人、ウルトラマンネクサス。赤きジュネツスに変身する

と、ガイに加勢し、メカゴモラを次々と倒していく。

「なかなかやるな」

「そちらこそ！」

マキと名乗った彼と共に闘し、ガイはついに大量のメカゴモラを撃滅した。

「しまった、チャリジヤを追わないといけないんだ」

ガイは別れも早々に、飛び立とうとする。それをマキが呼び止める。

「待つてください、奴の居場所ならわかります。一緒に向かいましょう」

思いがけない提案に驚いたガイだが、彼の収納された石像が迷いなく発進するのを見て、ついていくことに決めた。そして彼らは、再び別の宇宙へ突入する。

数々の宇宙でロボット怪獣を暴走させた諸悪の根源、チャリジヤ。奴との決着が間近に迫っていた。

闇の侵攻

石像の内部へ戻るマキ。外にいるオープと共に、その石像は発進。別の世界へとつながるゲートが出現し、彼らはそこへと入つていく。

「いつもこうして、別の世界に渡つてているのか？」

ガイが精神感応……テレパシーでマキに問い合わせてくる。マキは、まだ目を覚まさない二人の仲間を気に掛けながら返事する。「途中までは仲間の船で。でも、あるときこの石像が現れて、光の示す先に進んでくれるんです」

「その石像は、さつきの宇宙でも、おそらく他の宇宙でも、闇の呪いに対抗する光を発していた……あれは一体なんだ」

マキは、それについて全く知らなかつた。

「呪い!？」

「ああ、メフィラス星人、チエーン星人、ダンパレダ星人、そしてさつきのチャリジヤ。四人がおそらく裏でつながつてゐる」

「俺たちが今まで倒してきた宇宙人だ……いつたい、何が目的で……」

「宇宙バイヤー・チャリジヤ。奴は怪獣を使つて金儲けしている奴だ。報酬につられて動いているとみていい。すると……」

「裏で、操つてゐる黒幕がいる！」

——漆黒の中——

宇宙の闇よりも暗く深い暗黒。そのさらに奥に、悪魔はいた。

「チャリジヤ……奴も所詮は他の三匹と同じく、駒に過ぎない」

ただの“駒”である彼らを従えているのには、理由があつた。

この宇宙……広大な無数の並行世界には、それだけ危険な“敵”が存在していた。

それらにすぐに感知されてしまうほどに、悪魔の力は強大だつた。

悪魔は、まず洗脳や誘惑などで駒を用意した。

報酬を約束にチャリジヤを従え、悪魔の力の一端、機械を暴走させる特殊能力を受けた。

チャリジヤは、危険な敵のひとつである宇宙正義のグローカー軍団を仕留め、さらにロボット怪獣軍団を貸し与えることを約束に、ダンパレダ星人セライとチエーン星人を誘惑。

さらに、悪魔の力で生み出したスパークドールズをメフィラス星人に貸し与えた。

彼らは、力と引き換えて悪魔の命令に従つた。無数の並行宇宙に“呪い”を打ち込み、宇宙全体のバランスを崩す。

それが悪魔の狙いであつた。

悪魔の作戦は見事に成功。対応に追われたウルトラマンキングは、宇宙をつなぎとめることにエネルギーを費やした。その結果、悪魔を感じできぬままに不意打ちされ、倒れることとなつた。

これはウルトラマンノアにも有効だった。彼もまた、悪魔の存在に最後の最後で気づいたが、その時にはすでに遅く――

こうして、悪魔は宇宙に大混乱を巻き起こした。宇宙正義、ウルトラマンキング、ウルトラマンノア。

主要な柱を失つたこの宇宙たちは、もうすぐすべての闇に包まれる。

そして――

悪魔の次なる狙いは、M78星雲、光の国。巨人の全滅であつた。

ダイナミックな戦士

——惑星ルーリン——

揺れる岩山を背に、人々は逃げ惑う。

山を揺らし人々を襲うその元凶は、巨大なロボット怪獣・ギガデロスだ。

チャリジヤがウルトラマンオーブ到着前に起動・暴走させたロボットの一体だ。

逃げ遅れ、地面に倒れ込んだ子ども。そこに、一人の男が駆け寄る。

「坊主、大丈夫か」

助け起こして、逃がしてやり、それと同時に巨大なそのロボットを見据えている。

「チャリジヤはとつぐにこの世界を去つたようだな」

そう言つて構えをとる彼の手には、巨人の顔をかたどつた、リーフラッシャー。

「こいつを倒して、さつさと追いかけないと」

それを高く掲げ、叫ぶ。

「ダイナーネッ!!」

彼の体が光に包まれる。光の中から現れたのは、巨人・ウルトラマンダイナ。

ギガデロスの腕のブレードがダイナを襲う。それを受け止め、キックを使って相手との距離を取る。

歴戦の戦士であるダイナは、敵の特徴をよく観察し、的確に攻撃を加えていく。

そして、敵の動きが鈍ってきたところで、とどめのソルジエント光線！

敵は爆散した……かに思えた。しかし、爆風を押しのけて現れたのは、一体増えて二体になつたギガデロスの姿だつた。

これにはダイナも驚きを隠せない。もう一度光線を打ち込む。だが、またもや分身。今度は三体となつて向かってくる。

ダイナはすかさずタイプチェンジ！ 青きミラクルタイプに変身。

ウルトラマジックで三人に分身し、ギガデロスをそれぞれ迎え撃つ。

三体を追い詰め、一つの場所に追い込んだところで必殺のレボリュームウェーブ・アタックバージョン。

それは衝撃波が生み出すブラツクホール。

次元の狭間へとギガデロスを追いやつた。

人々の無事を確認し、ダイナはその惑星を去る。向かうはチャリジヤのいる世界。

以前共に戦ったウルトラマンオーブ……ガイから連絡があり、この世界にいると聞いてやつてきたのだ。

しかし、少々遅かつたようだ。

そこに、コスマス……春野ムサシもやつてきた。

「大丈夫か、こんなところに居て」

「ああ、グローカーの動きは落ち着いた。だけど、元凶を倒さないことはどうにもならないからね」

——別の宇宙——

地球。

怪獣たちと共に存し、また自然とも共存するその星で、そのマシンは唸りをあげていた。

「大丈夫そうか」

男が言う。

「ああ、一度、行つたことがあるからね、座標はばつちりさ」

そのマシンは両脇に巨大なタイヤ型の円柱を備えた、それ自体がアルミ缶のような形状であった。

しかし、その大きさは人よりもはるかに大きく、そして現在二名が搭乗していた。

ひとりは、藤宮博也。

先日、ウルトラマンアグルへと変身してネクサス……マキとともにこの星を防衛した。

もう一人は高山我夢。このマシンを作った張本人である。

彼はもう一人の巨人・ウルトラマンガイアなのだが、この宇宙の危機に備えてチャリジヤを追うため、マシンの調整に追われていた。そのため、先日は姿を見せなかつたのだ。

そのマシンとは、時空移動マシン・XIGアドベンチャー。

マシンが起動し、フレキシブルローターが回転し始める。それはやがて、徐々に空間に歪みを作り出す。そして並行世界への道が切り開かれる！

二人は、ウルトラマンダイナの呼びかけに応え、チャリジヤが向かつたとされる世界に向けて発進した。

そこは、かつて我夢が初めてアドベンチャーで訪れた並行世界——

ウルトラマンの存在しない、かつてキングオブモンスと対決した世界であった。

超時空編

巨人を超える巨人

夕焼けが射す街並みに、突如人型ロボットの群れが現れた。その動きには秩序がない。ひたすら暴走し、人々を襲つて暴れ回る。

そこに、時空の歪みが生じた。そしてその奥から、巨大な駆動マシンが出現。

人間と同じ大きさほどのその暴走ロボット・ユートムを次々とひき潰しながら疾走する。XIGアドベンチャー。別の宇宙から、この地球を守るために時空を超えてやって来た。

搭乗していた藤宮と我夢が降りると、そこにはまだ暴れ足りない様子のユートム軍団。それを押しのけて、飛行船型石像が突進。蹴散らされるユートムたち。

石像から出現したマキが、すぐさまエボルトラスターを抜刀し、変身。その視界には街を焼き尽くさんと投下されるロボット・ザムリベンジャーナの姿が。

「うおおおっ!!」

雄たけびをあげ、ネクサスへと変身。無機質な単眼の機械人形を食い止める。

「藤宮、俺たちも行こう」

「ああ！」

藤宮の手にはアグレイター、我夢の手にはエスプレンダー。

赤と青の光が二人を包み、大地の巨人・ガイアと海の巨人・アグルが降臨する。

チャリジャが解き放つたと思われるロボット怪獣のガラモンとクレージーゴン。

ガラモンに向かつて突進していくガイア。アグルは巨大なクレージーゴンのアームをアグルセイバーで受け流す。

「ええい、どいつもこいつもッ!!」

作戦の邪魔をされていら立つチャリジャ。ロボット怪獣たちが暴

れていた隙にこつそりと“呪い”を植え付けようとする。だが、

「やせるか！」

蹴りをくらい、その場に情けなく倒れ込む。

「ウルトラマンオーブ！ 貴様ツ！」

チャリジヤは緊急時のために残しておいたユートムを出すが、ガイに赤子の手を捻るかのごとくたやすく仕留められてしまう。

「へそへへそへへそへ！」　来い　キンクシミリとも！」

次に出現したのはキングジョーブラックとキングジョースカー／ソ、ニンヂョウ兵、ニンヂョウダ

オープがすぐさま変身し、キングジョーⅡを食い止める。しかし、

手数が足りない！

チヤリジヤを追つてやつてきた戦士たち。ウルトラマンダイナ、そしてコスモス。

え撃つ。

ガイアも本領発揮。スプリーム・ヴァージョンにヴァージョンアツブし、ガラモンをつかんで、その強靭な腕力で投げ飛ばす。

カーティンはシンクシリクそのまま激突を起こす。 一体の回路はシンリート

「へっ……」のままでロボットどもがやられるのも時間の問題だ」「…………」

ボツト怪獣が残されていない。

ここで奴らを片付けておいた方がいいな

戦うウルトラ戦士たちとロボット怪獣の頭上に、彼らよりもさらに巨大な大魔法陣が出現する。

「今度は何だつてんだ!?」

ガイがそう言いながら、キングジョーIIの鋼鉄のボディをオーブ力リバーで突き刺す。

マキはジユネットスへ変身、地面に倒したザムリベンジャーに必殺光線を放つて沈黙させる。

巨大な魔法陣から、それに見合った巨大なロボットが出現する。

「あれは……ちとでかすぎじゃないか」

コスマスたちがいつたん退避すると、彼らが相手にしていた怪獣たちが押しつぶされていく。

その巨大な人型のロボットに、ダイナだけが顔をしかめた。

「うそだろ……」

それは、かつてダイナが相手にした巨大なロボット（の頭部）、ガラオン、その完全体だった。

150mはあろうかというその巨体、そしてウルトラ戦士たちと同じ程度はある巨大なその頭が、6人の巨人を見下ろしていた。

悪魔の傀儡

「みんな、避ける！」

コスマスの声に反応し、五人がその場を離脱。そこに、巨大なロボットの足が振り落とされる。

「あぶねえ……気を付けろ、デカいだけじゃない」

ダイナが皆に注意を促す。

「アイツは頭部だけで普通のロボット怪獣と同じくらいの強さだ、それに」

ダイナがその頭部に意識を集中させる。コクピットから、禍々しい闇の気配が漏れ出ている。

「パイロットはチャリジャの野郎だ！ 油断するなよ！」

巨大ロボットガラオ。かつて、ダイナが戦った怪獣だ。しかし、その時は頭部のみだった。

今、この場所には全身のパーツがそろっている。大量破壊兵器として、集まつた六人のウルトラ戦士をものともせずに暴れる。

「頭部を壊せば、動きが止まるはず！」

上空に向かって飛び立つマキ。しかし、何か強力な力によつて飛行を維持できない。

「な、何だこれ……うあつ」

情けなく地面に叩き付けられる。

「これは……特殊な電磁波!? これで頭部への到達を阻止しているのか！」

ガイアが冷静に分析する。

「ならば、足を切り落とすまで！」

「オーブカリバー！ うおおつ！」

アグルのアグルセイバーと、オーブのオーブカリバーが両足を同時に攻撃。斬撃音が響き渡る。

「何ッ！」

「そんな」

しかし、未知の素材による脚部がその剣先を阻む。

「何て固い素材……いや、逆に柔らかい！　だから衝撃を吸收してしまうんだ！」

「突破口が開けない……俺たちの技はすべて対策済みってことか」

手をこまねいでいるうちにも攻撃は放たれる。頭部からのレーザー、振り落とされる足、電磁波を伴うパンチ。

それらを紙一重で避けながら、戦士たちは打開策を探す。

「電磁波をまずは消そう！　腕を攻撃するんだ！」

「よし！」

ダイナのソルジエント光線とオーブのオリジウム光線が腕部に向け放たれる。しかし、光線さえも電磁波によつて阻まれてしまう。

「ダメか……」

「もつと推進力を保つた……光の弓矢のようなものでないと届かない！」

ガイアの発言に、マキの脳内が反応を示した。

「光の……弓矢……!?」

記憶が混濁する。経験したことのない記憶——

紫の剣のネクサス、ジュネツスピオレ。鮮やかな赤の槍のネクサス、ジュネツスルージュ。青の弓矢のネクサス、ジュネツスブルー。そして、銀色の……

「ハツ！」

「おい、大丈夫か？」

オーブに声をかけられ、マキは意識を取り戻す。

「お前、その色……」

ダイナに声をかけられ、見るとその体は青色に染まっていた。

先ほど混濁した記憶の中で見た、弓矢のネクサス、ジュネツスブルー。

マキは新しい姿に変化していた。

「この力なら！　皆さん、下がつていてください！」

マキの胸のエナジーコアから、光の弓が出現。それを腕に装着し、光の矢をつがえる。

狙うは右腕。そこに向け、電磁波をものともせず突き進む。

オーバーアローレイ・シユトローム

それは右腕部分の掌から上腕部までを貫通し、破壊する。

ガラオンの巨体が体勢を立て直す間も無く、二射目が左腕を貫く。
「いいぞ！ 破片は俺が始末する！」

そう言つてオーブは、オーブスプリームカリバーを放つ。
街に降り注がんとする腕の破片は空中で塵と化した。

「コスマス、頼んだぞ」

「ああ！」

コスマスの必殺技、コズミューム光線が頭部に向けて放たれる。

それは、闇の存在のみを消滅させる光。

「ぬおおっ!! ここで死ぬわけには！」

チャリジヤがもだえ苦しむ。

ガイアとアグルによる、合体光線ストリーム・エクスプロージョン
がガラオンの巨体を粉々に碎いていく。それを、ダイナのレボリウム
ウェーブ・アタックバージョンが吸い込んでいく。

「これで街への被害も少なく済む」

その最後のひとかけらを吸収し終えた、その瞬間。

「これが……私の『最後の仕事』というわけか！ 私も道具に過ぎないという事か！ ルシフェルウ!!」

コズミューム光線により消えかけていたチャリジヤ。そこに差し
伸べられた最後の救いの手は、悪魔との契約だった。

「ウオオオ!!」

ブラックホールの間隙より轟く咆哮。

チャリジヤは闇の巨人ダークメフイスト・ツヴァイへと変貌し、一
命をとりとめた。

自分を追い詰めたウルトラ戦士に一矢報いようと、その腕の刃を構
えて突撃する。

「私ハ!!! 貴様ラヲ!!! ウオオオ!!!」

「チャリジヤ! お前は俺の仲間を傷つけ、宇宙に混乱をもたらした
!」

マキはチャリジヤにその罪を突き付ける! その姿は鮮やかな赤、
ジユネツスルージュに変化!

「俺はお前を許さず、そしてここで決着をつける!」

光の槍はマキのエナジーコアから腕へと持ち替えられ、その切っ先
はチャリジヤへとまつすぐ向けられる。

オーバーランスレイ・シユトローム

その一投は、光を以て闇を祓い、刺突を以て巨人を碎いた。

「皆さん、ありがとうございます」

感謝を告げるマキ。

「まだ終わつちやいねえよ、黒幕を倒さないと」

そういつて去つたダイナ。

「僕たちは、黒幕の目的や行方を調査する」

「お前にもやるべきことがあるんだろ」

XIGアドベンチャーで元の世界に帰つたガイア、アグル。

「また会うこともあるだろ」

光の剣と共に飛び立つオーブ。

「がんばれよ」

肩に手を置き、そう励ましてくれるコスモス。

全員、向かう先は違えども、目的は同じ。

全ての宇宙に平和を。

彼らは、悪魔を倒すための一歩を再び踏み出し始めた。

Nの世界編

もうひとりの悪魔

—M78スペース—

「辺境惑星に膨大な量の悪性エネルギーが出現。ウルトラマンキングを狙つた者と同質の存在と思われます」

そう報告する隊員を下がらせ、隊長ゾフィーが分析を急がせる。

「どうだ」

「はい。これはかつて、我々の宇宙に飛んできた外的存……ダークザギと全く同じ反応です」

「しかし、奴は以前我らとウルトラマンノアの協力で封印したはずだが……」

何らかの形で封印を脱した可能性。エネルギーを吸収し復活した可能性。ウルトラマンと同じく、完全な死が存在しない可能性。そして、何者かが復活を手助けした可能性……。

今現在、宇宙警備隊は“悪魔”に対抗するため、その戦力のほとんどを光の国に結集している。レオ兄弟など一部は休眠しているキングの護衛についている。そのため、大きな戦力をダークザギに割くことができない状況に居るのだ。

「仕方ない、80を呼べ。勇士司令部のメンバーと共に向かわせる」「以前ダークザギを撃退した時のデータと比べると、戦力が少なすぎると思われますが」

「大丈夫だ。80は、マイナスエネルギー……いわゆる、悪性の力に対する対処法に詳しい。それに、我々はあの時よりも強くなっている」こうして、選抜されたメンバーがダークザギ撃退のために派遣された。

突如小惑星帯に出現したダークザギは、光の国へと侵攻。その途中で、80率いる迎撃部隊と接触した。勇士司令部のメンバーによるコンビネーション攻撃でダークザギを無人の惑星に誘い込む。

ダークザギが地面に降り立つ。すると、勇士たちはウルトラランスを構えて次々と降下。80の指揮の下、ザギのエナジーコアに向けて連撃を加える。ザギはそれを超重力光線、グラビティ・ザギで次々と彼方に追いやる。

投擲されたランスもザギ・リフレクションで反射し、投擲主を撃墜。並の勇士たちを歯牙にもかけず、次々と始末していく。

そこに、空中から強烈な蹴りが飛び込んでくる。

80のウルトラ400文キックだ。

ザギが目障りに感じ、ザギ・シユートを放つ。しかし、80はフーフープ光線でそれを完全に消滅させる。

これがザギの逆鱗に触れた。暗黒の炎を拳に纏わせ、ザギ・インフェルノを放とうと接近する。

しかし、80は暗黒のエネルギーの扱いはお手の物だ。ウルトラオーラと呼ばれる光の矢が闇のエネルギーを消滅させる。

ザギは暗黒の力が無効と知ると、格闘戦に切り替える。だが、80はディフェンス念動でこれを回避。ウルトラショット、ウルトラスパイラルビームなど遠距離攻撃で徐々に攻撃を与えていく。

高速瞬間移動であっさりと80を捕らえるザギ。そこですかさずボディスパーク！ 体に電撃を纏わせ、逆にザギを捕らえる。

この至近距離で80は目から、腕から、そして腹部から三つの光線を同時に放つ。

ウルトラアイスピット、サクシウム光線、バツクルビーム。

吹き飛ばされるザギ。戦闘力では80を圧倒しているはずだが、いかんせん相性が悪い。

そして、ほとんどなすすべなく撤退を余儀なくされてしまう。

宇宙空間に一時退避したザギ。必殺光線ライトニング・ザギを放ち、惑星ごと80を始末しようとする。すると、その惑星付近の空間が歪む。

ザギの強力な光線は、現在不安定になつてゐる並行世界同士のゲートを開いてしまつた。

ザギはその中に光線ごと吸い込まれていく。

→ “N”の世界 →

ダークメフィスト・ツヴァイへと変貌したチャリジヤを撃破したマキは、5人のウルトラ戦士と別れ、再び宇宙船型石像に乗り込んだ。アンゲルとリーゼ……二人の意識は未だ回復しない。しかし、エボルトラスターの射す光はマキを休ませてはくれない。この世界への別れもそこそこに、石像は宇宙を超える別の世界へと突入する。

マキはウルトラマンオーブ……クレナイ ガイとの会話で新たな事実を発見した。自分の中に宿るウルトラマンネクサス、そしてエボルトラスター、飛行船型の石像。これらは宇宙の異変を解決するために動いている。事実、行く先々で4人の“悪魔の手先”と戦ってきた。さらに、一度として同じ世界には出なかつた。

悪魔の手先の蒔いた呪いを石像が解除していたという。エボルトラスターの光は、これを指していたのだろう。そして、手先はすべて倒した。

では、次の行き先は？

新たな世界が見える。闇の巨人が同時に別のゲートから飛び出てくる。どうやら、まだ戦わなくてはいけない敵がいるらしい。そして、自分はいつたい何者なのか？

失った記憶。闇の巨人と戦ったという謎の記憶。なぜか取り戻していくウルトラマンネクサスの力。

それは、この戦いの先にあるのだろうか。

宇宙空間で、ザギとネクサスの決闘が始まつた。

レベル3マルチバースの悲劇

ダークザギの圧倒的な力の前に、ネクサスは為すすべもなく弾き飛ばされる。小惑星に何とか着地するも、その土台ごとザギの光線が破壊していく。マキはジュネットスブルーに変化し、弓による一射を狙うが、ザギは瞬時にマキの背後に回り、隙を見せない。

ジュネットスルージュに変化し、光の槍で何とか攻撃を受け流す。しかし、ザギ・シユートを連続で放たれ、ついに直撃を受けてしまう。「ぐあつっ！」

ダメージを受け小惑星の地表に叩き付けられる。宇宙船型の石像はこの世界の”呪い”を解除しに行つたのか、もう姿は見えない。援護は期待できず、絶体絶命に陥つた。その時、

「ご苦労、ダークザギ。時は来た」

宇宙空間の間隙より、闇と共に異形の影が現れた。

背中から二本の大きな突起が禍々しく生えている。

そして、その影が、ダークザギを吸収し始めた。

「その力は貴様のような負け犬には使いこなせん……私が有効に活用してやる」

「ウオオおおお!!!」

ダークザギの肉体は影と一つになつていき、やがて一体の闇の巨人となる。

マキを見るその冷たい目は、ダークザギの赤色ではなく不気味な青色に光っていた。全般的にダークザギに比べ体が鋭利に、そして強靭に進化しており、背中からは先ほど影から伸びていた突起も確認できる。それはまるで”翼”のなりそこないのようだつた。

「何だ……お前は」

マキの問いに闇の巨人は答える。

「我こそ使い魔ファウストと悪魔メフィストを従える真の悪魔、ダークルシフエル、ここに並行世界のザギの力を取り込み魔王・ダークルシファーへと変生した！」

「ダーク……ルシファー!?」

「貴様は幾度となく私の計画の邪魔をした……それもそのはず、私の世界でも貴様が最後まで抵抗してきたのだからな、ノア。だが、貴様は一度私に敗れ、弱体化した。呪いを打ち消して回っているようだが、せいぜいできたのは我が配下を消す程度。私の力の前では塵に等しい」

そう一方的に言うと、ルシファーの腕から螺旋状の暗黒衝撃波が放たれる。それはウルトラマンネクサスの反射能力をはるかに超えて、巨人に死をもたらす。

だが、唯一それに対抗できる力が手を差し伸べた。

衝撃波はバリアにさえぎられ、霧散。そこにいたのは、今にも倒れそうなほど傷ついた、しかし神々しい巨人だった。

銀色の体。ネクサスのものと同じ深紅のエナジーコア。しかし、その背中の翼は折れている。

悲しき戦士、ウルトラマンノアがそこにいた。

ウルトラマンノアの思念派が、ネクサス＝マキに届く。

（もう、時間も力もない。君にすべてを話し、私は消えるだろう——
宇宙を、救ってくれ）

ウルトラマンノア。彼の世界は、スペースビーストと呼ばれる存在の脅威にさらされていた。

ノアは傷つき、ネクサスへと弱体化しながらも、人間たちと絆を結び、真の姿を取り戻した。それがマキのいる世界のネクサスの歴史だという。

しかし、もし、ウルトラマンノアが敗北した世界があつたとしたら？

今日の前に傷つきながらも現れた、翼の折れたノアは、そんな世界からやつてきたというのだ。

ビースト・ザ・ワンという存在とダークザギが一体化し、ダークザ

ギを超える敵ダークルシフエルが出現し、ノアは敗北。

ノアは辛うじて一命をとりとめるが、その世界は掌握され、ルシフエルはさらにあらゆる並行世界（レベル2マルチバース）を征服。彼はその欲望を達成したかに思えた。

だが、欲望とは限りないものである。

かれは、その強大な力でifの世界（レベル3マルチバース）へと侵攻。

これは本来起こりえないことで、なぜなら並行世界と違い、同一存在が出会つてしまい宇宙の倫理が崩壊するからだ。

ルシフエルはすべての並行世界をも制圧する強大な力でこの常識を突破。

なんとか力を回復し追い付いたノアだつたが、ルシフエルはifの世界のもう一人の自分、ダークザギを吸収しダークルシファーへと進化してしまつた……

ここまでが、この傷ついたノアが辿つてきた全く別の次元の物語である。

ノアはすべての力を振り絞り、マキを守り、そして別の世界へと転移させた。

しかし、ルシファーは容赦せず暗黒波を放ち、ついにノアの命は絶たれた。

マキはとある場所で目覚めた。

ノアによって転移されたこの場所はどうやら安全のようだ。しかし、もう宇宙には安全な場所などどこにもなくなる。

魔王、ダークルシファーはすべてを焼き尽くすまで止まらない。

だが、手立てはある。マキが一体化しているこの力……ウルトラマンネクサスは、ウルトラマンノアと同一存在のようだ。翼の折れたノアでもルシファーの攻撃を一度は防いだ。ならば、ネクサスがノアへと完全復活し、さらに他のウルトラ戦士と協力すれば、ダークルシ

ファーを打ち倒す可能性も見えてくるはずだ。
マキは不安と希望を抱え、まことにこの場所がどこなのかを探りに向
かつた。

ウルトラの星

—Nの世界—

「ノアは完全に始末した……もう一人のノアは逃がしたが……奴も力を完全には取り戻していない」

ついに魔王へと変生したダークルシフナーは、マキを抹殺する段階に計画を移行した。

「この宇宙の脅威……キングは潰え、こちらのノアももうすぐ始末し終える。そうすれば、残るはウルトラの星のみだ」

ルシフナーは自分の有り余るパワーの一部を分離。

離れた力は異形の影となり顕現する。その名はダークルギエル。
「行け、我が分身ルギエルよ。こちらの世界のウルトラマンノアを抹殺するのだ」

マキは無限に広がるかに見える広大な自然の中で、一人の男性に出会った。

精悍な顔つきに屈強な肉体を併せ持つた、まさに”戦士”と呼ぶべき男だ。

「すみません、ここは一体……？」

「ん？ 君は、どこから来たのかね？ この星のものではないようだが」

男の衣服は白い布で、どこか民族衣装を思わせる。

「この宇宙に危機が迫っています、そのせいで俺はここまで飛ばされてきました」

ありのままを話すと、男は真剣な表情で聞き入る。その様子から、根がとてもまじめな性格なのだろうと窺える。

「宇宙の魔王……それはどんな」

男が言い終わらぬうちに、空から黒い物体が飛来。

「もう嗅ぎ付けられたのか！」

マキを追つてやつてきた異形の存在、ダークルギエルが豊かな自然あふれる大地に漆黒の足を叩き付け着地した。

その深紅の釣り目がじつとマキを見つめる。

マキはエボルトラスターを構え、変身しようとするとする。

それを男が呼び止める。

「質問の答えがまだだつたな。ここはウルトラの星、U40。そして

私はウルトラの戦士ジョーニアス！ 若者よ、共に戦おう！」

マキは驚きながらもうなずき、エボルトラスターを抜刀。奮起の叫びをあげる。

ノアは自分の命が潰えるその時までマキを気遣い、ウルトラの星という最も安全な場所へ転移させてくれた。彼の願いを、叶えなければ！

「うおおおおッ!!!」

ジョーニアスはその手にビームフラッシュヤーを。手を高く掲げ、額に当てる叫ぶ。

遠い地球の仲間を思い出しながら。

「ウルトラチーンジ!!!」

銀色の巨人、ウルトラマンネクサス アンファンス。

U40最強の戦士、ウルトラマンジョーニアス。

二人の巨人が、美しき大地に降り立つた。

「行くぞ！」

ジョーニアスの咆哮と共に、ネクサスは赤きジュネツスへと変化し、走り出す。

ルギエルの胸から放たれる光弾をかわし、懷へ飛び込んで光弾を喰らわせる。

ジョーニアスは空高くジャンプし、急降下からのキックを放つ。ルギエルは圧倒的な戦闘力でマキを弾き飛ばし、ジョーニアスのキックに対抗してエネルギーを込めたパンチを繰り出す。

両者の攻撃が拮抗し、衝撃波を発生させる。

吹き飛ばされたマキは瞬時に起き上がりジユネツスブルーに変化。

ジョーニアスとエネルギーのぶつけ合いをしており手が離せないルギエルにオーバーアローレイ・シユトロームを撃ち込む。

「グオッ!!」

脇腹に光の矢が直撃。力を維持できないまま、ジョーニアスのキックを正面から受けてしまう。

だが、ルギエルもやはり悪魔の力の一部なだけあり、そのくらいでは倒れない。逆にジョーニアスの足をつかみ、地面に叩き付ける。マキはジュネツスルージュに変化し、光の槍を投擲するが、それをルギエルは闇のエネルギーで黒化し、自分の得物としてしまつた。

「これは……私の手に良くなじむ」

「まだだつ!!」

マキは、以前脳裏に焼き付いた謎の記憶を思い起こした。その中に
は、紫のネクサスが居た――

ネクサスの体色が変化していく。

ウルトラマンネクサス ジュネツスピオレがそこに現れた。

賢者の導き

紫のネクサス、ジュネツスピオレ。マキの脳裏に現れた謎の記憶そのままの姿でそれは現れた。

腕を胸のエナジーコアにかざすと、腕から真っ直ぐに伸びる光の剣。

それを構え、マキはダークルギエルに向かっていく。ルギエルは先ほどマキが投擲した光の槍を闇に染め、それでマキを突き刺さんと向かってくる。

しかし、そのルギエルの動きが一瞬停止する。

背後から放たれたのは、ジョーニアスが自身のエネルギーを球状にして投げつける必殺・プラニウム光線！

数々の怪獣を打ち破ってきたその技でも、ルギエルの動きを一瞬止めることしかできなかつた。だが、それで十分だつた。

マキはルギエルの核となる部分に的確に光の剣を突き刺していく。「グぬおおおお！」

核の崩壊に耐えながらルギエルはマキを闇の槍で弾き飛ばすも、すでに手遅れだ。

その体は霧散をはじめ、闇の粒子となつて消えていく。

それを見届けたマキとジョーニアスは変身を解除。

U40に訪れた未曾有の危機は、間一髪のところで回避された。

その数刻後。

ジョーニアスがひとりの老人をマキに紹介した。

「マキ、こちらが大賢者だ」

「大賢者……」

「ああ、大賢者は我々U40の最高指導者で宇宙の様々なことを知っている……君の助けになるだろう」

マキは大賢者に今までの旅、そして宇宙に迫る危機・ダークルシファーについて話した。

大賢者は、その内容に深い理解を示した。

「なるほど……その別次元のウルトラマンノアは、おぬしを安全な場所にワープさせ、それがここだったのじやろう」

大賢者は一息ついて話す。

「しかし、おそらくより安全な場所がある。同時に、ルシファーが次に狙う場所であろう」

「そ、そこは一体」

「M78星雲……光の国。もう一つのウルトラの星」

U40よりも多くのウルトラヒューマノイドの戦士が居る光の国。確かに、ルシファーにとつては邪魔になる存在だ。

マキは、次の目的地をそこに定めた。

しかし、以前別れたきり、アンゲルとリーゼを乗せた石像は行方不明だ。おそらく、別の並行世界の「呪い」を消して回っているのだろうが……

石像がないとなると、別の宇宙まで行くのは骨が折れる。上手くゲートを見つけることができればいいが。

そう考えているマキに、大賢者が声をかけた。

「もしよければ、儂が光の国までの道を示してあげよう」

U40と光の国には交流があり、以前も光の国の若者タイガが訪れたことがあるとジョーニアスは語った。

マキはその提案をありがたく受け、ジョーニアスとともに光の国へと向かうことになった。

M78スペース M78星雲 光の国

大賢者が示したゲートを通り、マキとジョーニアスは光の国にやってきた。

街が全てクリスタルでできているかのようだ、美しい星だ。

そして、彼ら二人の到着と同時に、ウルトラマンゼロもやってきた。「おう、久しぶりだな！ そっちの人は知り合いか？ まあいい、今大変なことになつてるんだ、一緒に来てくれ！」

一方的にまくし立てられ、連れてこられたのは宇宙警備隊本部。

そこには、ウルトラ兄弟やウルトラの父などそうそうたるメンバー

が揃っていた。

「おや、あなたはU40の……」

「ええ、ジヨーニアスです」

ゾフィーとジヨーニアスが挨拶を交わす。

すると、ゼロが声をあげた。

「おい、親父？」

ゼロの父親、ウルトラセブンの姿が無かつた。彼はウルトラ6兄弟の一人で、本来ここにいるはずだつた。

不在を不審がるゼロに、ウルトラマンヒカリが声をかける。

「セブンなら、今別件で席を外している。まあ、すぐに戻つてくるだろう」

「別件？」

「ああ、ゼロの反応が近くの宇宙で見つかつたから迎えに行かせたんだが、入れ違いになつたようだな」

「俺の反応？」

ヒカリが不思議な機械を見せながら解説する。

「これは、ゼロの持つウルティメイトブレスレットの放つ特殊な光をキャッチしているんだ。この光、何故か別の宇宙に行つてもこちらでキャッチできてる……」

マキは光の国の現状についてウルトラマンメビウスに教えてもらつていた。

「なるほど……ウルトラマンキングが……」

マキの知らないところで、光の国もダークルシファーの被害を受けているようだ。

マキは、来る決戦に備え心を落ち着かせるのだつた。

セブンXの世界編

石像とノア

「確かに、ここに反応があつたはずなんだがな……」

ウルトラセブンは、光の国の緊急事態に備え、自身の息子である戦士・ウルトラマンゼロを迎えていた。

そこは、M78星雲光の国がある世界とは別の並行世界。以前、セブンはこの世界に来たことがあつたため、この役目を引き受けたやつてきたのだ。

その際は地球人との一体化における不具合で姿が変化したが、今はその心配もない。

セブンはとにかく、ウルトラマンヒカリから渡されたレーダーとともに、ゼロの持つブレスレットの反応を示す場所へと向かった。宇宙空間をしばらく飛行。すると、反応のある場所に何かがあった。それは宇宙空間の中でなお暗い、漆黒の”呪い”だつた。

セブンは危険なエネルギーを発するそれを放つておけず、すかさずエメリウム光線を発射する。しかし、呪いはさながらブラックホールのように光線を吸い込んでしまう。

そこに、小さな人間ほどのサイズの石像が飛んできた。宇宙空間の中で意思を持つかのように真っ直ぐセブンに向かってくる。いや、その石像が目指しているのはセブンがいま相対している呪いであつた。石像は飛行船型をしており、その先端から小さく、しかし凄まじいエネルギーを込めた光の玉を撃ち込んだ。それはさながら、真の力を放つたウルトラキーのようであった。

放たれた光球は呪いの近くに漂い、その効果を打ち消しあつている。

これが崩れかかっている並行宇宙同士のバランスを保つていると
は、ウルトラセブンには知る由もなかつた。

「いつたい何がどうなつてているのだ。ゼロはどこへ行つた」

セブンは、レーダーがキャッチしているのはゼロではなくこの石像

だと確信した。その理由は推測できなかつたが、彼はそれを抱えて元の宇宙へと帰還することにした。

M78星雲 光の国

光の国へ帰つてきたウルトラセブンは、ゼロが既に戻つてきていることを聞いて驚いた。

「おかしいな。やはり故障か？」

ヒカリが首をかしげる。

マキはセブンが抱えてきた石像を見て胸をなでおろした。アンゲルとリーゼが乗つた石像だ。

「よかつた、無事だつたか」

すると、石像がマキとウルトラ戦士たちの前で光り始めた。

「何だ、これは!?」

セブンが説明しようとすると間に、その光は増していき、そしてネクサスの姿のマキのエナジーコアに入つていく。

「ううああっ!!」

気づけば、マキは不思議な空間にいた。目の前には無数の記憶の断片が映像として流れている。その中には、青や紫のネクサス、知らない人間などマキの知らない記憶もあつた。

ふと、声をかけられる。

後ろに、銀色の巨人が立つていた。

マキは一度見たことがあつたが、その時と違い、翼は折れていなかつた。

こちらの世界の”ウルトラマンノア”だ。

神々しいオーラを放つているが、マキにはそれが懐かしく感じられた。

「あなたは……」

「君は、私だ」

ウルトラマンノアは、この事件をめぐる自身の境遇と、マキの正体について話し始めた。

M78スペース編

銀色の翼飛翔するとき

「俺が……あなたと同じ？」
マキの問いにノアは答える。

「そうだ」

「始まりは奴、ダークルシファーがこの世界に来たことだった。奴は、こちらの並行宇宙のすべての生命体を凌駕していた。もちろん、私も奴に敗れた……しかし、奴には恐れていることがあった。それは、全並行宇宙の力の結集だ」

「みんなが力を合わせれば、奴に勝てる？」

「そうだ。奴はそれを阻止するため、手下を使ってすべての宇宙に”呪い”を放ち始めた」

「呪い……ガイさんが言っていたやつか。たしか、石像が消してくれていたというけど」

「それは、私の力の一部、ストーンフリューゲルだ」

「私は呪いを早急に消し、宇宙の崩壊を防ぐ必要があった。しかし一方で、手下たちを倒さないと呪いは再び散布されてしまう。そこで、私の意識と残った力の7割をストーンフリューゲルに持たせ、呪いの除去に当たった」

「そ、それで……残りの3割は」

「それがマキ、君なのだ」

淡々と伝えられる事実。失った過去が明かされた。いや、實際には過去などなかつたのだ。

マキは、ただの力だった。ウルトラマンザ・ネクストという、純粹で無垢な力だけの存在。

しかし、彼はノアが残してくれていたエボルトラスターの光と周りのウルトラ戦士、そして仲間と関わる中で意識や感情が発生していった。一つの新しい人格が生まれていたのだ。

彼が見た謎の記憶は、ウルトラマンネクサスと一体化した人間たち

の記憶。それは彼を進化へと誘った。

マキという人格は曖昧で決して強くはない。しかし、ここまで世界の崩壊を食い止めてきた。かすかだが、マキという人格には、"意思"の力があつたのだ。

そして、今二つの力が一つになる。

マキが旅の中で取り戻したネクサスの力と、ノア本体の力。目を覚ますと、そこには銀色に輝く伝説の巨人が顕現していた。それはマキでありザ・ネクストであり、ネクサスであつた。しかし、こう呼ぶのがふさわしい。

ウルトラマンノア。銀色の翼と赤きエナジーコアを輝かせ、その手のひらには二人の旅の仲間。それを安全な場所に横たえ、そして振り返る。

そこには、光の国の戦士たち。

並行宇宙の力を結集すれば、勝てる。

ノアは、光の国の戦士たちとともに、ダークルシファー迫りくる宇宙空間へと飛び立つた。

ノアと共に飛び立つた戦士は4人。

宇宙を股に掛けるウルティメイトフォースゼロのリーダー、ウルトラマンゼロ。

U40最強の戦士、ウルトラマンジョニニアス。

ウルトラ六兄弟とメビウスの力を結集し合体したスーパーウルトラマン、メビウスインフィニティー。

ギヤラクシーレスキューフォースより救援にやってきたウルトラマンリブット。

宇宙における最強の戦士たち。その力が正義と平和の翼として飛翔する。

究極の闇と光

既に戦闘は始まっていた。集結した戦士たち、それをものともせず雍ぎ払うダークルシファー。

ダイナ、ガイア、アグル、コスモス、オーブ。

以前マキと共にチャリジヤに立ち向かつたウルトラ戦士たちでも全く歯が立たない。

リブットが高速接近し、格闘技を連発する。そこにゼロも急降下からキックを喰らわせるが、それをルシファーは倍の力で撃ち返す。ジヨーニアスのプラニウム光線も暗黒の波動に阻まれて消滅。

「貴様らは一度、私に滅ぼされている……より強くなつた私に勝てるはずがない！」

そこに、時空のゲートを開いて援軍が現れる！

ウルトラマンゼロアーマーを纏つたウルトラマンXが、ギンガ、ビクトリー、ジードを連れてやってきたのだ。

ルシファーを上回るスピードで突撃するノアとメビウスインフィニティ。Xたちもタイミングを合わせ、それぞれの技を展開する。これにはさすがのルシファーもダメージを受け、すこし後ずさる。だが、

「甘いな、滅びゆく世界の住人たちよ」

ルシファーの背から伸びる棘が紫色に発光する。振り上げた手から無限の”闇”が発生！

その闇は戦士たちのいる空間を包み込んでしまう。

「なんだ、これは……!?」

「俺たちのエネルギーが失われていく！」

「くつ……力が発揮できない……」

戦士たちの光を打ち消す、圧倒的な闇の霧。それがノアの元へも迫る。

「ハアッ!!」

ノアは光を放ち対抗するが、ダークザギギを吸収し強化されたルシファーの闇にはかなわない。

徐々に押されていってしまう。

みると、周りの戦士たちは闇によつて漆黒に染まつてしまつてい
た。すでに、身動きも取れず、死を待つばかりだ。

このままでは、闇によつてすべてが包まれ、宇宙は崩壊してしま
う

…

それでも。

ノアの、そしてマキの胸の奥で何かが叫ぶ。それはノアの意志であ
り、マキの願いでもあり、そして今まで変身してきた適能者の祈りで
もあつた――

さらに、今は動けず、離せず、光も失われていくウルトラ戦士たち
も――

――諦めるな!!!――

その強い心の灯火は闇の中でも輝き続ける、決して消えない赤き
炎。

闇に侵食された戦士たちのカラータイマーが、ノアのエナジーコア
が、霧の中で光を取り戻す。

ルシファーが目敏くそれを捉え、闇を更に放つ！

「貴様らには一片の希望さえも生み出させはしない！ 消えろ！」

しかし、光は消えない。

数多くの並行世界から集まつた、光の巨人たち。その光が一つに結
集し、闇を打ち碎く”煌めき”を顕現させる！

「何だ、この光は！ 輝きは！ 闇が、我的力が」

次の瞬間、急激に放たれた圧倒的な量の光にルシファーは吹き飛ば
される。

それは、この場にいるすべての光の巨人の”光”を、”希望”を受
けて現れた伝説の超人！

闇を打ち消す究極の光、

グリット・ターティガ!!

果て

そこに顕現した黄金の巨人・グリツター・ティガは、幾人もの巨人たちの光から現れた実体のないものだつた。しかし、ダークルシファーの闇を確実に押し返す圧倒的な光を放つていた。

そのカラータイマーから放たれる技・タイマーフラッシュで周りの黒霧は消滅していく。

さらに、グリツター・ティガは全エネルギーを集中させ、究極のタイマーフラッシュユニスペシャルを放つ！ それは光を失つた巨人たちを次々ともとに戻していく。

「動けるようになつたぞ！」

「よし、反撃だ！」

「うおおおッ!!!」

グリツター・ティガは光を放つて霧散した。しかしその力は戦士たちを蘇らせ、反撃の狼煙とした。

圧倒的な熱量の光で体を焼かれ、動きの鈍つたダークルシファーにメビウスインフィニティーの突進が決まる。

それに続き、他の戦士たちも追い打ちをかける。

「グオオ！！ 我は知らぬぞ、こんな展開を！ こんな状況を！ なぜだ！」

「俺たちはあいにく、諦めるつてことを知らないんでね！」

「そうだ、我々ウルトラ戦士は悪にも闇にも屈しない！」

無数の光線がルシファーの漆黒のボディに注がれる。そこに、ノアも光線を撃ち込もうとする。だがその時。

「クウウウ……ここで退くのは屈辱だが、我的存在には代えられん」
そう零すと、ルシファーは強力なエネルギーで時空を歪め、その狭間に飛び込んでいった。

「まずい！ このままでは取り逃がすぞ！」
「そ者はさせねえ！ 行くぜ！！」

ゼロが勢いよく飛び出そうとウルティメイトイージスを装着する。
「待て、ゼロ」

背後から凄まじい霸氣を持つた声が届く。ウルトラの父とウルトラマンレオ、アストラを連れ、伝説の超人ウルトラマンキングがやってきた。ルシファラーの力が弱まったことで容体が回復したようだ。「ダークルシファーが逃げ込んだ先はお前が普段行っている並行世界とはレベルが違う……そのイージスをノアに預けるのだ」

「ノアに？」

「ああ、ノア。君なら行けるはずだ。ifの世界、レベル3マルチバースへ」

キングに言われたとおりにゼロがアーマーを渡す。

「もともとアンタから貰つたもんだからな。あんたの方が上手く使えるのは道理つてもんだ、頼んだぜ」

Xも自身のアーマーをノアに差し出す。

「我々の力も微力ながら使つてほしい」

ノアはゼロのイージスを上半身に装着し、Xのゼロアーマーを弓矢の形態で腕に持つ。そして、キングや戦士たちに頷いた後、ルシファーの開けた大穴に突入していった。

ifの世界（レベル3マルチバース）……ウルトラマンFの世界
「土星付近で謎の反応！ 強力な時空場の乱れが観測されました」
「状況は」

「今は治まっています。反応は一瞬だけでした」

「ふむ……この位相パターンは……」

「ええ、以前出現した個体名・ダークザギ、そして戦士Fに位相が酷似しています」

ifの世界（レベル3マルチバース）……ウルトラマンデュアルの世界

「おつと、何だ！ あぶねえ！」

ものすごい勢いで二つの存在が移動するのを、橙色の戦士ナヴィガーレ・別名ウルトラマンウンリュウは目にした。

それは凄まじい威力と速さで時空場を突き破りこの世界に現れ、この世界を去つていった究極の光と闇であつた。

二人は、幾数もの世界を移動した。

その先でついに、ルシファールは追い詰められた。

「貴様!!! 貴様なんぞに我が負けるなどありはせぬ!!」

ノアの奥底でマキが叫ぶ。

「お前は俺に負けるんじゃない。」俺たち”に負けるんだ

ノア自身の力、イージスの力、ゼロアーマーの力。ノアを源流とする三つの力がその手の弓矢に集中する。

「これが、闇を討ち祓う、光だ!!」

それは一分の狂いもなく正確に、ダークルシファールを貫いた。

新たなる旅立ち

マキ……

声が聞こえる。マキは、再びノアの内側で目覚めた。だんだんと意識がはつきりしてくる。

「確かに、俺たちはダークルシフナーを追い詰めて……」

「そこへ、ノアが語り掛けてくる。

「そうだ。我々は奴を打ち倒した。宇宙に平和が戻ったのだ」

「そうか……よかつた」

ノアはマキにその後のことを説明し始めた。

あの後、状況を知ったキングが皆に伝え、同時に宇宙の異変も消失したらしい。

そしてノアも今、元の時空に帰つてきたところだったのだ。

彼らウルトラ戦士たちは、それぞれの世界に帰つていったのだ。自分たちの守るべき場所へ。

「さあ、残るは君だけだ、マキ。君はどうする」

「俺は……」

マキはノアから生まれた存在。故郷と呼べる場所はなく、ルシファーを滅した今、やるべき目的もない。

しかし、マキは悩まなかつた。

「俺を、どこかの世界に連れていくてくれないか」

「構わないが、これからどうするのだ。私と離れれば、君はもう巨人には変身できない」

「それでもいい。俺は、そこで俺のやるべきことを探す」

目には希望の光が満ち溢れている。それはノアの記憶の中の適能者たちに似ていた。

「君は勇敢だ。かつて、私が出会った者たちのように。私は無意識のうちに、そのような人物を作り出したのかもしれないな」

「そうかもしれない。でも、俺は俺だ」

「そうだな。君には君の人生がある。その中で、何か残せるものがあれば、君には素晴らしい価値がある……」

「それが何かはわからないけど……探してみるよ。なにもない俺だからこそ、これから何でもできる気がする」

「おつと、君にはいるじゃないか。仲間が——」

遠い宇宙——どこかの星

「はあっ!!」

マキは勢いよく目覚めた。

見渡すとそこには、遠くまで広がる街並みが。幾数の宇宙で見てきた青色の星、地球だ。

「あ、起きましたよ」

「ここはいつたいどこなの?」

振り返るとそこには、久しく言葉を交わしていなかつた二人の姿が。

「アングル、それにリーゼ。二人とも、もう大丈夫なのか」

「もうすっかりね」

「ちよつと記憶があいまいですけどね……それよりマキさん、いったい何があつたんですか?」

マキはいつの間にか胸にかけられていた、エナジーコア型のペンダントを手にして言った。

「ああ、それはな……」

ノアと別れ、遠き宇宙でマキは仲間と共に暮らし始めた。彼はいくつもの世界を巡り、ついに自分の正体を知つた。

そしてこれから、彼の新たな旅が始まる。それは、人生という旅——

彼に、何ができるのか。何を為すのか。それはまだ、誰にもわからぬ。

番外編

平穩と不穩

これは、マキがウルトラマンノアと分離したすぐ後――二人の仲間アンゲル、リーゼと共に地球にやつってきたときのことである。

マキは目を覚ました後、再開を果たした二人の仲間に、彼らが眠つていた間の出来事を話して聞かせていた。

「――と、いうわけで宇宙は救われたんだ」

「へえー、私たちが意識失つてゐるあいだに、そんなことになつてたんだね」

「それで、ここはどこなんでしょう」

アンゲルがキヨロキヨロと辺りを見回す。小高い丘のようなそこからは、遠くまで街並みが見渡せる。

マキが何かを察知し、遠くに目を凝らす。

すると、遠くから高速で近づいてくるものがある。それはいくつかの宇宙で見かけた人間の発明品、車だ。どうやらこの宇宙の地球上も、御多分に漏れず人間が暮らしており、文明もそれなりに発展しているようだ。

道路を走つて車は、マキたちのいる方へ近づいてくる。

黒くて武骨な印象を与える車は、マキたち三人のいる丘の近くに停車した。

「マキさん、リーゼさん、あれはいつたい……」

「俺が様子を見て来よう」

アンゲルとリーゼを待たせ、マキは車に近づく。

車からは一人の青年が降りてきた。

「この辺のはずなんだけどな……おや」

マキに気づいて青年が手をあげる。マキはやや警戒しながら話しかける。

「ここにちは。俺はマキ。ここには来たばかりなんだが……あなたは

？」

「どうも。僕はゴダイ・マドカ。神話研究学者だ、よろしく」

そう名乗った男をマキは観察する。ラフな格好に身を包み、眼鏡を着けている。いかにも知的そうな風貌だ。

一方、マキは旅のものと言わんばかりのぼろい布を纏っている。アンゲルは黒い衣装をまとつておりまだマシだが、リーゼは赤いアーマーのようなものが装着されたスーツを着ている。

つまり我々三人は、どう見ても怪しい。傍からみれば不審者も同然だ。今までには宇宙崩壊の危機を前にそんなことを気にかけてはいらぬかつたが、これからは服装にも気を使つた方がよさそうだ。

そんなことを考えていると、マドカと名乗った男はアンゲルとリーゼにも手招きする。

「唐突な質問で悪いけど、君たちは……宇宙人かな？」

三人は顔を見合わせる。この男は、自分たちが宇宙人であると確信を持つたうえで、接触を試みてきたという事だ。当然、それだけの自信と力が無ければできることではない。

「どうしてそれを？」

「ああ、僕には少し特殊な力があつてね。それで、君たちが宇宙からこの星に来るのが分かつたんだ」

マキは今までの旅の経験から、この男が巨人の力を持つていると察知した。それは、以前出会つたウルトラマンダイナやルシファードとの決戦で現れた黄金の巨人に似たオーラを感じさせた。

「それで、私たちになんの用？」

リーゼがぶつきらぼうに聞く。マドカはそれを気に留めず、穏やかな口調で返答する。

「ああ、君たちが何の目的でこの星に来たのか知つておきたくてね。何せ、この星は五年前に怪獣たちにだいぶ痛めつけられたからね」

「それなら大丈夫です。ぼくたち三人は旅の途中でここを訪れただけなので」

「そう話すアンゲルにマキは困つたように言う。

「しかし、俺の目的はもう終わつてしまつたし、石像もないから移動も

できないんだが……」

そんな様子の三人に、マドカは提案する。

「こんなふうに地球に突然来る友好的な宇宙人は稀にいるんだ。良かったら住居とか紹介するよ」

亡命や観光、移住など様々な理由でこの星には宇宙人がやってくるようだ。それを、この国は秘密裏に許可しているようだ。

五年前に怪獣……邪神と呼ばれる存在に脅かされたこの世界だが、一方で巨人に助けられた。

これを受けた政府は、公にはしていないが友好的な地球外生命体を保護し、かなりの自由も与えている。

マキたち三人は、この取り決めに従つて住居と戸籍を与えられた。しばらくはバイト生活に追われそうだ。

しかし、地球の危機の際に貢献すれば、特別手当が出るらしい。

巨人の力は失ったマキ。リーゼは格闘に優れ、アングエルは光線の反射ができる。何もできないというのは歯がゆいものだ。

「でも、アンタは宇宙を救つたんだから、ちょっとくらい休んだつていでしょ」

「僕たちが活躍して補助金をもらつてきますよ」

こうしてマキたち三人は、ひとまず安息の地を得た。今まで宇宙を飛び回り、息をつく暇もなかつた彼らにとつてやつとつかんだ平和な生活であつた。

この星には怪獣も出現せず、静かな日々が流れていつた。時々、マドカは様子を見に来た。神話研究学者は暇なのだろうか。
その日も、マキはバイトを終え、国の支給した住居に帰つてきた。すると、別室のエンゼルとリーゼ、さらにマドカと知らない女性がリビングに集まっていた。テーブルを囲んで皆座つてゐる。卓上には何かの資料。

「そちらの女性は?」マキが聞く。

「はい、私はミズオ・ユリカという者です」

女性がスッと立ち上がり、自己紹介をする。

「彼女は僕の知り合いでね。警察官なんだが、君たちのようないわゆる宇宙人にも理解のある人だ」

マドカは眼鏡を拭きながらユリカを紹介する。

「それで、ミズオさんと貴方はどうして今日ここへ？」

その問いにマドカは、マキに資料を渡してから答える。

「最近、密輸や密売を主導していた裏ルートの異星人グループが横行していくな。警察が手を焼いていたそうなんだが……」

「先週から昨日にかけて、メンバーのほとんどが惨殺死体で発見されたんです」

ユリカは説明を引き継ぎながら、さらに資料を広げる。

「それならば大した問題ではありませんでした。確かに、惨殺という方法は問題ではあります」

資料にはいくつかの写真と地図。事件現場のものだ。それには、この住居の付近のものもあつた。

「一番の問題は、密売グループに所属していない宇宙人も殺害されていたことなのです」

「その人は、犯罪には？」

「全く関わりのない宇宙人たちでした……ただ」

「？」

「その宇宙人は、一般には侵略や悪事を行い、危険視されている宇宙人だつたのです。バット星人や、マグマ星人のような……」

つまり、亡命や移住など、ただ地球にやつてきた無実の宇宙人を、出身だけで危険視し殺害した。そして――

「キール星人。リーゼさんも狙われる危険があります」

「そんな！ リーゼはそんな悪事など」

思わず声を荒げるマキを、リーゼが宥める。

「まあまあ。たしかに、うちの出身はあんまり褒められたところじやないからさ。でも、黙つて殺されるつもりもないよ」

マキは落ち着いて、ユリカに聞いた。

「それで、犯人の目星はついているんですか」

ユリカは、さらに一枚の写真を取り出した。そこには、夜闇に紛れて犯行を行う赤い通り魔の姿があつた。

血に濡れた槍を構え、その全身も赤に包まれている。

「これは……」

「レッド星雲・レッド星出身。その男の名は、レッドマンだ」

THE NEXT RESTAURANT

警官のユリカからもたらされた情報。それによると、宇宙で危険視されている種族を狙う通り魔が出没しており、キール星出身のリーゼも危ないとのことだ。

リーゼはその日からバイトや外出を取りやめ、自身の居住スペースにいる。買い出しはユリカが代わりに行つているとのことだ。

既に一週間が経過したが、通り魔に新たな動きは見られない。おそらく、他の宇宙人たちも警戒しており、通り魔にとつての犯行のチャンスが減っているのだろう。

だが、いつまでもこのまま待つというわけにはいかない。彼らの不安材料を取り除くため、マキはアングエルと共に動き出した。

ユリカが提供してくれた情報をもとに、通り魔の行動パターンを割り出す。そして、夜。

犯行現場付近に二人はやつてきた。

「ここで奴を捕まえてリーゼを安心させてやらないとな」

「でも、相手は通り魔ですよ？ 大丈夫なんですか？」

不安がるアングエル。その後ろに人影が近づく。

「！」

「わっ!!」

そこにいたのは、マドカだった。

「ちょっと、あんまり大声出さないでくださいよ」

「どうしてここに」

「あなたたちだけでは心もとないのでね」

マドカはそう言つて、先導する。その後ろを、マキとアングエルがついていく。

「おそらくこのあたりでしょう。しかし、あなたたちは戦闘能力が高いとは言えませんからね……ここで待っていてください」

「いや、俺も行く」

マキが名乗り出るが、アングエルに止められる。

「ダメですよ！ マキさん、もう変身できないじゃないですか！」
マドカが一人で暗い闇の中へ歩いていく。

数刻後。

物音ひとつしない静寂の中で、アングエルがごくりと息をのむ。
するとその時、ヒュンと風を切り、凄まじい速度で何かが横切った。
！」

それはマドカの近くを通り過ぎようとして、しかし失敗する。マド
カの出した腕がその何かを捉えたのだ。

「何だ、お前は……邪魔を、するな……」

何かは、マドカの腕で殴り飛ばされてその高速の動きを止めた。
アングエルが光をあてるとき、その姿が明らかになる。
その体は深紅。そして紅蓮の仮面を装着し、その手には切っ先の鋭
いナイフが握られている。

「あなたがレッドマンですね」

マドカが問うと、赤い男はうなずいた。

「私は正義の戦士、レッドマン」

そう答える彼の目には、一点の曇りもない。

マドカはそんな様子のレッドマンを責め立てる。

「あなたは確かに、悪を討つた。だが同時に、罪もない宇宙人をも殺害
した。そのことについて、どう弁解するつもりですか？」

「奴らは、悪。存在など、断じて認めない」

「……あなたは、人間が一人犯罪を起こしたからと言つてそのすべて
を殺しつくしますか」

「人間だって同じことをやつているさ。害獸は駆除する。たとえそれ
が生きるための行動だとしても」

「動物と知的生命体では話が違う！ あなたの矢つていることは殺人
だ。それはあなたがいうところの、悪の宇宙人と同じだ」
「悪を減らし、人々を守っている。それが正義でないとなぜ言える！」
二人の論戦は平行線だ。マキもその行方を見守る。

しかし、先にレッドマンが動いた。

「貴様が正義の妨害をするというのなら、悪と断定し、貴様を討つ！」

取り出した槍・レッドアローを取り出し、投げつける。

「マドカさん！」

マキとアンゲルが飛び出す。

そこに立っていたのは、等身大の戦士だった。

古代の戦士・ウルトラマンティガ。それが、マドカの持っていた力だつた。

「こう見えても、五年前は怪獣相手に戦つてたんだ。舐めない方がいいよ」

その手に捉えたレッドアローをレッドマンに投げ返す。

レッドマンは槍を蹴り上げ、レッドナイフを握りなおして急接近してくる。

「貴様だつて怪獣たちを殺してきたのだろう！　それと同じだというのに、なぜ邪魔をする！」

ナイフの連撃をティガは的確にさばき、エネルギーの矢を放つ。「奴ら邪神は人類に明確な敵意を持つていた！　だが、宇宙人たちの中にはそうでもないものも多い！」

レッドマンは頭部からの光線でそれを捌く。

距離を取ったレッドマン。その腕に電撃エネルギーが充填され、目が発光！　両腕を合わせ、電撃光線・レッドサンダーが放たれる！

一方ティガも、その体にエネルギーを集め、必殺のゼペリオン光線を放つ！

両者の光線が激しく激突！　その衝撃波は、等身大の戦闘ながらマキたちのところにまで及ぶ。

その影響で、マキとアンゲルの頭上に、巨大な鉄片が落下！
「危ない！」

レッドマンとティガがすかさず光線の打ち合いを止め、駆け寄るが間に合わない。
体の小さなアンゲルをかばうマキ。すると、胸のエナジーコア型のペンダントが輝き――

そこには、銀白の戦士が立っていた。鉄片をその胸の頑強な鎧で防ぐ。

その姿は、マキが初期の戦闘で変身していたウルトラマンザ・ネクスト アンファンスに酷似していた。

その胸部にはエナジーコアはなく、ゼロのウルティメイトイージスに似た鎧が装着されている。

マドカが駆け寄つて聞く。

「君、変身できなんじやなかつたのか？」

「わかりません。でも、とつさに守ろうとしたら、この姿に」

「ふむ。それが、君の再始動の姿ということか。いいね！」

天使も無事だつたようで、マキの姿に見惚れている。

「すごいじやないですか！ もしかして、ノアという方が残してくれた力なんでしょうか？」

「かもしれない。それか、偶然による奇跡か――でも」

マキはレッドマンに振り返る。

「力は、悪を討つために使うものじゃない。守るために使うべきだ！」

レッドマンはそれには何も答えず、無言で去つていった。

「これで、良かつたんだろうか？」

「どうだろうね」

「ひとまず戻りましよう。もう真夜中ですよ」

数日後

この一件が報告され、マキは報酬をもらうと同時に、国の対地球外生命体特設チームの初期メンバーに選ばれることとなつた。

「メンバーは俺だけつて、どういうことだよ……予算は降りてるし、仲間を集めないとな。天使、リーゼ、それからユリカさんも入つてくれないかな」

「おつ頑張つてるな、隊長！」

「メンバーが一人なんで、自動的に隊長になつただけですよ……って言うか、マドカさんは神話の研究つて何やつてるんですか？」

「ああ、これが？ 神話を紐解くと、五年前に現れた怪獣たちのことがわかるんだ。この伝承によると、ガタノゾーイアには二体の弟がいるとされている。彼らの名前はイソグサ、それからゾス＝オムモグといつ

てね……」

そして、あの日からレッドマンの凶行は起きていない。だが、彼を完全に説得できたわけではない。もしかしたら、また会うこと、ぶつかることもあるかもしれない。

マキは、新たな自分の力を、ザ・ネクスト・リスタートと名付けた。新たな世界で、彼は再始動を始める、その覚悟を示したのだ。

そして今日も彼は往く。この広い世界のどこかで、誰かを守るために。

The End